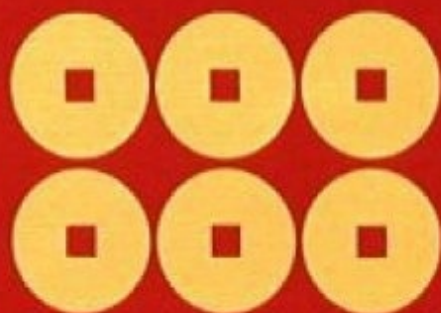


六文錢はため



木村 長門

六連銭はためく

—家康が怖れた武将

真田昌幸—



上田城

「お屋形様、徳川の軍が迫っております」

物見の報告が上田城にいる昌幸の元に届けられた。

「おう、やつと来たか」

昌幸は立ち上がり城下が見渡せる所に立ち、しばらく徳川勢が来る方向を見つめていた。いかに徳川と渡り合い、勝利を収めるまではいかなくても、徳川が撤退すれば、信州に真田ありとその名は轟く。その戦い方をずつと考えていた。

「信之に伝えよ、かねての通り、と」

「はっ！」

御側衆の海野孫太夫は早速昌幸の長男信之が布陣している戸石の砦へ伝令を遣わした。

伝令は「山猿」と呼ばれている集団がその任についている。一種の忍者組織であり、山峡の多いこの地方には、すばしこい人間が多かったことにもよる。

伝令役の「吾助」は信之の所に向かった。信之には頭領として「佐助」がついていた。

佐助は吾助より御屋形様の触れを聞き、信之に伝えた。

「かねての通り、と御屋形様からでございます」

「よし、出陣じゃ、信繁！いくさじゃ」

「はっ」

弟の信繁（幸村）は身支度をすばやく整え、兄に従った。

「佐助！」

「はっ！」

「仕掛けは抜かりないであろうな」

「抜かりはございませぬ。用意万端整ってございます」

「うん、あとの手筈頼んだぞ」

「はっ、ご武運を」

佐助は信之一行を見送ると、二人の輩下の者を引き連れ、城下の町外れにある叢林へと急いだ。そこには、招集を受けて武装した農民が集まりだしていた。

信之は上田城下への入口へと急いだ。徳川軍が攻めてくるのは神川を渡り、城下から大

手門へと侵攻してくるのは、常道と見ていた。神川の対岸には約二百の兵が配置されていた。が、ともに戦う指令は受けていない。しかし、いつきに城内に退却したのでは、作戦が見破られてしまう可能性があった。戦の潮時が重要な役目をおっている。したがって、信之らに徳川軍の気を引きつけ、城内へとさそう魂胆であった。そこには、面白い畏が仕掛けられていた。それは普段思えば何でもないことではあるようだが、ひとたび混乱状態になると人は冷静でいられないという心理をついたものであった。こういった心理作戦は、昌幸にとって、武田家で養われた巧妙さが充分身に染み込んでいた。

上田城を攻略する徳川の陣容は、当時日本の中にあつて最強の軍団の一つといえた。かつて、三方が原の合戦の折は、武田軍の前に敗走の屈辱を味わった家康であるが、その後、屈辱を味わうような戦はしていなかった。

鳥居元忠、平岩親吉、大久保忠世、保科正直・正光ら練達の武将等を筆頭に総勢約七千の兵をもって、真田を駆逐せんと進軍した。これに対し、真田の兵は約千二百、農兵をいれて千五百という兵力であり、徳川方が圧倒的に有利といえた。しかし、勝負はして見なければ判別できない。その手本のような戦いとなった。

鳥居元忠は、長篠の合戦の折、鉄砲に撃たれ股を傷つけ片足が不自由となったが、第一線で働き続ける忠臣であったし、平岩親吉は、家康と同じ生まれ年であり、長子信康の傳役となつている。大久保忠世は家康の父広忠から仕え、戦績にすぐれ、蟹江城攻撃に際しては、七本槍の一人として数えられた。長篠の合戦に折にも、その旗印である金蝶羽は目立ち、信長は感嘆の言葉を授けている。いずれも練達の武将に率いられた徳川軍は、意気揚々とした面持ちで真田との合戦を迎えようとしていた。

「注進でござる！彦右衛門尉殿！」

物見の者が馬をものすごい勢いで操り、鳥居元忠の元へ馳せ参じた。息を切らしている。

「この者に水を与えよ」

水囊から水を飲み干すと、大きく息をつき話始めた。

「この先に小川があり、対岸に二百ばかりの兵がついております。また、山手より数百の軍勢が降りてくるのが見えましてございます」

「あいわかった。・・誰か、主計と七郎を呼んで参れ」

「はっ、早速に」

「敵は伏兵を潜ませ翻弄する作戦で望んでこようが、たかが数は知れておる。伏兵ももの数ではない」

「城外にいる兵を蹴散らし、一気に城内に雪崩こめば、われらが勝利するは必定」

平岩と大久保の両武将が元忠の元へきて俄か軍議となった。当然、ここは一気に攻めたてて上田城を奪おうという結論にいたった。

徳川軍は軍勢を整え、河岸に集結し、対岸に見える真田の軍勢を見据えた。兵の数は寡少であるとみてとれる。ひとひねりで上田城を攻めようと攻撃を開始した。

「一ひねりじゃ！潰せ！」

「おうっ！」

徳川軍は川を渡り始めた。水流は緩やかであり、渡河は難なく終わりを告げた。真田軍からの攻撃は散漫で、弓矢が若干仕掛けられただけで、たいした死傷者もなく、上田の城下に突入した。数十名の真田勢と小競り合い程度で戦いながら、徳川勢は大手門近くまで迫っていた。徳川軍は道が迫り、曲がりくねり、巧妙に仕掛けられている板塀に気がつかず、むしろそれに従うように、大手門に迫っていた。

「真田の兵は腰抜け揃いぞ！蹴散らしてしまえ！」

真田の雑兵は徐々に押されながら上田城内へ後退してきた。この時分には真田信之と幸村の部隊約二百は横曲輪に集結しており、逆襲の時を今かと待っていた。

「御屋形様！徳川の軍勢は大手門に迫っております」

それを聞いた昌幸は軽く「うん」と返事をしただけで、家臣の榊津長右衛門と碁を打っていた。榊津は変わりにご苦労と声をかけただけで、再び碁盤と昌幸の顔を見比べていた。昌幸は何事か思案しているような、してないような表情で、榊津は不気味さを感じていた。

徳川勢の攻撃は勢いをますます増し、大手門を破られ、本丸に通じる門に迫っていた。

「彦右殿！敵は雑魚ばかりでござる。真田の侍は腰抜けどもでござろうや」

「おう！いとも簡単な戦じゃ。陽の高いうちに片付けようぞ」

鳥居彦右衛門尉は真田の有力武將の姿が見られないことに疑問を感じていた。まさか尻尾を振って逃げたのではあるまい。昌幸が、真田がそんな腰抜けとは思えなかった。

「徳川の軍勢は大手門を突破し、本丸に迫っておりまする。もう支えきれません」

昌幸は碁を打っていた手が一瞬止まったかに見えたが、ぼそと一言いつて碁石を置いた。音が大きく響き渡った。禰津はその布石を見ていった。

「これまででござる」

昌幸はにやりと微笑み、禰津に合図を送った。反撃開始である。

「手筈の狼煙を上げよ。甲冑を用意いたせ！」

「ははっ！」

しばらくして、合図の狼煙が本丸に上がった。と、同時に待機していた鉄砲隊と弓隊の一斉攻撃が始まった。櫓からの射撃は、門に所狭しという徳川の軍勢に降り注いだ。昌幸は、武田の無敵騎馬隊が、織田徳川連合軍の鉄砲隊の前に壊滅してしまったことを肝に銘じ、鉄砲の使用方法を研究させていた。鉄砲の数を揃えるには、資金が乏しく、当然その数は少なかつたが、その中で、少ない鉄砲でも早合と呼ばれる火薬の装填方法を研究させ、かつ習得させていた。これである程度の数の不足は補えると感じていた。

狼煙の合図を見た信之と幸村は時至れりと勇みたった。

「おう、この時を待っていた。幸村、遅れるでないぞ」

「おう、存分に働いて見せようぞ」

信之と幸村は二隊に別れ、徳川軍のどてっ腹を撃つという、搦め手作戦である。

「敵は眼の前ぞ！わが真田の真髓見せてくれよう！」

「おう！」

六連銭の旗印が幾竿も立ちのぼり大きく風にはためいた。

風にゆらゆらたなびいていた六連銭の旗印が怒涛如く動き始めた。六文の銭は六道ともいわれ、仏でいうところの地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上という一切衆生が善悪の業によっておもむく六つの冥界をあらわしている。死人を葬るとき棺に入れる六文の銭の事である。三途の川の渡し銭である。死を怖れぬ者と戦うことは尋常なことではない。

「潰せ！押し返せ！」

「オウー」

城内から富沢大学、矢沢頼定ら約五百が一気に打って出た。真田の勢いに押され徳川軍

は下がろうとするが、後から次々と前進してくる味方が逃げ道を阻み、行動が思うに任せず、討死する者が続出しはじめた。

「臆するでない！敵は寡少ぞ！押し戻せ！」

しかし、その徳川軍のどてっ腹に信之、幸村の軍勢が突進した。

「真田の伏兵だ」

「慌てるでない！」

制する言葉も混乱を引き起こしている者の耳には入らない。われ先にと雑兵は逃げることしか考えていない。一旦兵を引き揚げて態勢を立て直すしかあるまいと、大久保忠世は退却の合図を鳴らした。退却する徳川軍に更に追い討ちがかかる。

くまなく張り巡らされた迷路と板塀は明らかに退却するのに不便極まりないものとなった。陣取った農民兵は太鼓鉦を激しくならし、馬の興奮を高ぶらせ、火をつけられた塀は激しく燃え盛り、退却も難渋を極め、真田兵の攻撃は執拗であった。思ったような迅速な退却はとでもできそうでなかった。その中で討死していく將兵の数が増していく。

鳥居元忠の軍勢も耐え切れない。少数の踏ん張りも多数の流れを止める事はできない。

「ここで引くは三河武士の名折れでござる。逃げるに及ばず」

「踏みとどまれッ！」

「主水殿、このままでは犬死にでござる。再起を図ることも肝要」

「何を言うか。ここでおめおめと背を向けて逃げられようか。お主が万一生きて帰らば、わが死に様子々孫々まで語り継がれよ！」

本多主水の決意の程を確認した尾崎左門は、視界に主水の姿を再々見つつ退却した。主水は、その場を決して動かず、真田兵と渡り合い壮絶な最後を遂げた。

伏兵の真田信之、幸村兄弟は徳川の精鋭を蹴散らしながら、神川へと徳川軍を押しつめていった。計画通りに事は運んでいた。徳川軍は神川を渡ろうとしていた。川を渡れば、軍勢を再度まとめ真田と戦えると踏んでいた。徳川は真田の数倍以上の兵力があったのであるから、そう思うのも当然といえた。

その頃、佐助は神川の上流にあり、川を塞ぎ止めて水を貯え、材木も浮かべて時今かと待っていた。その合図ののろしが高々とあがった。

佐助は水を満々と塞き止めている堰を崩させた。川水は堰が壊れる音とともにうなり声を上げて、流れ出した。それは段々と加速し、荒れ狂い怒涛の如くとなつて下流へと押し出していた。材木も加わり、それはまた暴れ馬の様に前後左右に揺られて流れていった。

「さあ、行け行け！徳川を飲みこんでしまえ！」

下流では徳川の騎馬や徒歩雑兵が真田の追手から逃れるべく川を渡河していた。そして川を渡ったところで態勢を立て直し、再攻撃を試みる積もりであった。その時は、鳥居も大久保も同じ考えであった。今は混乱におちいっただけで、損害はそれほど受けていないと思われたからだ。だが、しばらくすると異様な音が響いてきた。それも音だけでなく、振動が川岸一体に伝わってきた。

「何ぞ？」

川を渡っている騎馬武者が上流の方を見た。雑兵も首を向けた。

「ゴッー！ドドッー」

それは津波のような高さに見えた。実際はそう高くはないのだが、現在は水嵩が少なく迫り来る水流は非常に高く感じるのだ。

「洪水だ！」

「水攻めだ。早く岸にあがれ！」

川の中にいる者達は慌てふためいて岸へあがろうと急いだ。水の流れは非常に早い。

「わあっ！」

あつと間に次々と水に飲まれ流されていく。かろうじて飲まれる前に岸にたどりついた者は、流れいく味方の兵士の断末魔を茫然と見ていただけである。寸前の所で、自分も同じ運命をたどったかもしれないという恐怖感と、助かったという安心感が交錯する。

川を渡る寸前の軍勢は、真田と戦うか、増水した川に身を投ずるかしかなかった。刀を抜き勇敢にも真田に向かう猛者もいたが、ままよと川に飛び込む者もいた。

「ここで引いては三河武士の名折れ！皆の衆特とご覧あれ！」

と、槍を構え、真田の雑兵を蹴散らす武将がいた。奥田孫太夫である。

「気骨ある武士とお見受けいたす。尋常の勝負！」

尋常の勝負とは一対一の決闘である。

「おうー！引き受け申す。某大久保家家臣奥田孫太夫でござる」

「真田昌幸が長子信之でござる」

「これは願ごうでもお相手できぬ御仁との勝負とはこの孫太夫嬉しき限り！勝負」

と孫太夫は槍を捨て家伝の宝刀を抜き、馬上で刀を頭上に掲げ突進した。二太刀三太刀を繰り返しかわした。しかし、腕はまだ信之が上であった。信之の切先が孫太夫の右胸を指し貫いた。痛みに耐えかね孫太夫は馬から落ちた。だが、孫太夫は立ち上がった。信之は側に駆け寄り、首を跳ねた。首は胴体から離れ地面の上に落ちた。その眼は見開き信之をまだ見詰めているかのようだった。胴体はしばらくしてから、ゆっくりと倒れた。

洪水は一瞬の出来事なので、しばらくすれば水位は下がり渡ることが可能となる。徳川勢の土壇場の奮戦により、持ちこたえ川を渡ることができた。真田勢は数の上では不利であることを承知していたので、これ以上は深追いをしなかった。

水攻めだけで徳川は二百近い兵を失い、再度攻撃するという戦意も失っていた。

「御屋形様、手筈通りでございました」

「徳川はもう来るまい」

「左様でしょうか」

昌幸は絶対の自信をもって言った。事実その通りとなった。

大久保忠世は部隊の掌握を図った。手痛い敗北を味わうとすぐには立ち直れないことをよく知っていた。忠世も昔天正二年遠江国の犬居城攻略戦の敗北の事を思い出していた。

あの時も雨と河川の増水が徳川の戦略を狂わせ、結局退却せざるをえなくなり、忠世自身も命からがらようやく逃れた。まだその時に比べれば、部隊は部隊としての組織を保っていたのが救いであった。忠世は將兵の顔を見渡した。その顔は不安と恐怖に満ちていた。忠世は鳥居元忠に自分の決心を伝えた。

「もはやわが兵卒及び腰でござれば、退きが妥当と存ずるが」

「さもあらん、同意つかまつる。無念ではあるが、いずれまた真田と戦うことがあるだろう。その時までお預けでござる」

「真田もこのまま逃げればここぞとばかり更に追手を差し向けよう。ここは堂々と隊伍を組み退きもうそう」

「殿軍は某が承る」

鳥居元忠が殿軍、最後尾を受け持った。

「兄上、徳川は堂々と隊伍を組んで引き揚げるようです」

「おう、殿軍は鳥居の旗印じゃ」

「今追い討ちをかければ、徳川は散々に蹴散らすことができように。父上は何故命を下されぬ」

「我兵の数は少ない。僅かな獲物のために兵を失うことはない」

信之と幸村は徳川軍が退却していく姿を悠然と眺めていた。

昌幸は天文十六年（一五四七）に幸隆の三男として生まれた。幸隆は当時甲斐国主武田信玄に仕え、服属の証として昌幸を人質として甲府へ送った。信玄は名門である武藤家を昌幸に継がせ武藤喜兵衛と名乗らせ、信玄の小姓としてとりたてた。しかし、群雄割拠する戦乱の世は、武田家にも暗雲がたちこめてきた。信玄が没して後勝頼が家督を継いだ、長篠の合戦において織田徳川の連合軍の前に自慢の騎馬軍団が壊滅し、真田本家の長兄信綱次兄昌輝ともに戦死してしまい、昌幸が本家を継ぐ運命になったのである。昌幸のとき二十九歳であった。

真田を継いだ昌幸は戸石城を本拠として上野への足掛かりを求め、謀略をもちいて岩櫃城と沼田城を手中に収めた。この沼田を手に入れたことが後にその表舞台に昌幸が登場することになる。昌幸は名将武田信玄に勤仕したことで、色々な戦術だけでなく、戦術もいつのまにか身につけていた。これが、信玄亡きあとも大いに役立つ宝となり、武田家滅びの経験はさらに乱世を生き抜く処世術をも身につけることとなった。

主家武田家は徐々に衰退の一途をたどり天正十年天目山で最後を遂げた。昌幸が家督を継いでから七年がたっていた。昌幸は坂東の覇者北条氏と織田信長とに臣従の態度を見せ、じつと状況を眺めていた。すると、信長は本能寺で横死して政局は再び不安定となり、このときとばかり甲州や信州は上杉、北条、徳川によって争奪の土地と化した。沼田の土地の問題からみ、昌幸は家康に決別に及び、上杉に心を寄せた。その仕打ちに家康は激怒り、上田城攻略の軍を起こしたのである。

その頃秀吉のもとに榑津甚六（甚六の弟甚八は真田十勇士の一人として登場する）と海野左衛門尉（真田十勇士の海野六郎は一族である）の二人は昌幸の書状をもって拝謁を願った。秀吉は小半刻ほど待たせた後、二人の前に現れた。

「ご拝謁賜り恐悦至極に存じます。信州小県郡真田昌幸の家臣海野義光と申します」

「うん、真田のものか。遠路大義である。して何用じや」

「主昌幸から太閤殿下への書状をまずはご覧ください」

甚六が書状を取り出し、側近の三成に差し出した。三成は手紙を受け取ると、秀吉に手渡した。秀吉は手紙を出し、しばしその文字の後を追った。そこには、徳川との戦いは我領地を守る戦いである事を訴え、太閤殿下には絶対の臣従を誓う旨が認められていた。

「昌幸殿の言い分もつともである。ところで戦はどうなったのか？治部聞いておるか？」

「いや、詳しくは聞いておりませぬが、家康殿から真田の仕置の為出陣する旨、文は来ております。が、それは内々にて」

「左様か？」

秀吉は扇で肩を二、三度軽く叩いていたが、その扇の先を鼻にあて思案にくれた。

「ならば治部、これは徳川と真田との私闘とも言えるのう。私闘ともなれば、豊臣家とは何ら関係がない。わしは知らぬこと」

「御意」

「海野とやら、昌幸殿の胸の内よくわかり申した。答めは致さぬとしよう。帰ってそう昌幸殿に伝えられよ」

石田三成は秀吉の意をくみとり、此度の戦は私闘ということで、なんら処罰はないゆえ、安心されよということを伝えた。

「はっ、ご配慮賜り恐悦に存じます。早速立ち帰り主に伝えます」

二人が帰った翌日、徳川が真田の拠点上田城を攻撃し、散々に打ちのめされ敗退したことを秀吉は寝所で聞いた。

「家康め、良い薬になったであろう。それにしても真田昌幸、徳川を手玉に取るとはたいした雄おとこよ」

秀吉は昌幸を敵に回してはならぬ相手の一人だと心に刻んだ。そして、自分が人目置い

ている家康を打ちのめしたこの武将に会ってみたいと思った。

上田城から撤退を開始した徳川軍は兵力を整えると、真田の支城丸子城を包囲する作戦をとった。徳川の動きを監視していた草の者はただちに昌幸に報告した。丸子城からも援軍を要請する狼煙を上げているのが報告された。

「信之、三百ほどを率いて尾野山に陣をしけ」

尾野山は上田と丸子の中間に位置し、丸子の様子がよく見える絶好の場所であった。

「信之、幸村とともに尾野山に向かいまする」

「決して、こちらから手を出してはならんぞ」

「はっ」

装備を整えた信之は迅速に動き、尾野山に陣を置いた。山上の丸子からでもよく見えるところに六連銭の旗印を数多掲げた。

徳川軍もこの援軍の旗印を確認した。

「彦右衛門殿、いかが致そう」

元忠は大久保忠世に答えた。

「ここは真田がどう出るか待つしかなかるう」

徳川軍にとつての早々の城攻めにより、手痛い被害を蒙っているだけにそう簡単には軽々しく行動できなかつた。

真田の草の者はこの間縦横無尽に走りまわり、情報を集めたり、徳川の雑兵の中に紛れこんだりしてデマを流したりした。

十数日が包囲したままむなしく過ぎた。徳川の糧秣も段々と底をつきかけてきた。打開策を考えねばならなかつたが、良い考えなど浮かぶはずもなかつた。しかし、時がたち、後方に詰めている真田の兵の数もたいしたことはないと思信でき、一部の兵を防御する形で配置しておけば、安心して丸子城攻略ができると考えた。

閏八月二十日、戦端が開かれた。鉄砲が放たれ、城に向かって徳川軍は突進した。城側の兵は約三百という寡少であるが、少ない鉄砲や弓矢を射掛け防戦した。崖から丸太や岩石なども落とし、登ってくる雑兵を蹴落としていた。

戦が始まったと聞いた信之は、すぐさま命を下した。

「幸村！一隊を率い、側面より徳川本隊を衝け！深追いはするな」

「わしは、目の前の雑魚を蹴散らす！」

「オウ、兄上！お任せあれ」

「出陣じゃ、狙うは徳川ぞ！」

「オー！」

信之の一隊は兵二百を率いて、殿軍の形となって陣を布いている五百の兵を襲撃した。

しかし、信之の作戦は突進すると見せかけ、直前で矛先をかえ、一目散に逃げる格好となっていた。いざと身構えた徳川軍は緊張の面持ちから、何事かと狼狽した。

「真田が逃げるぞ！皆の者追え！」

徳川軍は勇みたつて真田を追った。幸村隊の前には何も遮るものはなかった。

「突撃じゃ！」

「おう！」

幸村隊は突進し、攻撃に夢中になっている徳川軍を背後から襲った。

「真田の伏兵だ！」

「真田に囲まれるぞ」

丸子城を攻撃している徳川軍は突然の奇襲攻撃により狼狽し、動転していた。

「牧野隊は如何した」

「真田に打ち破れ申した」

混乱は、全くの事実を見失っていた。牧野隊は信之の策に翻弄され、陣地を離れ真田を追っていたのである。牧野隊が図られたと気付き戻ったときには、幸村隊は疾風の如く去っていった後であった。

徳川軍は一旦攻撃を止めた。数日後、家康からすぐ浜松に変えるよう急使が駆けつけ、徳川軍は囲みを解き、撤退を始めた。戦はようやく終わりを告げた。

徳川軍が撤退を始めたのは、浜松から家康の急使が駆けつけたからであった。そこには重大事が発生したので、すぐ帰国するようにとの沙汰であった。

家康の重臣の中心的存在ともいえる石川数正が秀吉に心を寄せ始めていたが、ついに徳

川家を捨て出奔し、秀吉の元へと赴いたのである。徳川家の屋台骨を揺さぶる大事件である。数正の政治や軍事における手腕は高く評価されていたが、数正は秀吉を家康より一枚上と判断した上での行動であった。

家康はその対応に追われ、組織変更などで対外戦闘などしばらくは自重せざるをえなかった。

その後情勢は刻々と変化する。昌幸は大坂城の秀吉の元へ向かい、次男幸村を人質として差し入れ大坂へとどめおくことにした。秀吉は家康と昌幸の仲を取り持ち、昌幸を家康の配下に置いた。その結果長男信之は本多忠勝の娘稲姫を正室に迎える事となる。

昌幸にとっては生きるための知恵を存分に働かせたといえる。周囲の敵と互角以上に渡り合い、あるいは偽り、ごまかし、融和して生き抜いてきた。そんな昌幸を支えるのは情報網であった。諸国の事情に疎くは生き残る事は至難の業であり、草の者を諸国に送り、情報収集にあたらせた。大坂には幸村がおり、そこにも草のものが常駐し、本国と連絡をとっていた。

「お屋形様、大阪より使いでございます」

「よい、通せ」

体の線の細い忍びが昌幸の前に伺候し平伏した。書状を懐中より取り出し、側近の瀬津に差し出した。瀬津はそれを昌幸に渡した。昌幸は女？ではと思った。

「そのほう、くのいちか。名を何と申す？」

書状を広げながら聞いた。

「シカと申します」

「大義であった。ゆるりと休め」

「はい」

くの一シカは物音一つ立てず、部屋から出ていった。くの一とは女の崩し字から来ており、忍びでは女の事を「くの一」といつていた。

「お屋形様、何か一大事でも？」

昌幸は幸村からの書状を眼にし、唇をかみ締めていた。

「また、いくさになるかも知れぬわ」

「いくさ？ですと」

「また徳川ですか？」

「いや、関東の雄、北条よ」

面白い事になるかも知れぬと、昌幸は思った。

天正十七年秀吉は小田原北条氏に上洛を促していたが、その条件として真田の領地沼田がからんでいたのである。

三 謀略

秀吉の小田原征伐の発端の一つは真田と絡んでいた。話は真田の沼田城の事である。

北条氏は上洛するには沼田が是非必要と秀吉に迫ったのである。

「家康殿とのとりきめで、上野国は北条の領地でござる。沼田に真田がいるは不条理きわまるもの。即刻立ち退きのご命令を」

と訴えたのである。

秀吉も北条を上洛させる腹積もりなので、ここは北条の言い分を聞いた。

「よからう。沼田は北条に与えよう。しかし、名胡桃（ナグルミ）城の知行地三分の一は真田に残すというす」

と裁定し、昌幸にもこの裁定を納得させた。

昌幸は、ここは秀吉の意のままに従った方が得策と、その裁定を承知した。しかし、頭の中ではある事を考えていた。沼田は武力ではなし、知恵を働かせて奪い取ると。自分が苦労して奪い取った城を取り返すのは、至極当然と思えたが、秀吉の手前、武力をもってして取る事は真田を残すために我慢するしかなかった。しかし、その方法は以外にも、北条からやってきたのである。

沼田城は元々沼田氏の居城であったが、天正八年（一五八〇）昌幸は調略を尽くして、沼田を手に入れた。それは、草の者を城下に潜ませ、城将藤田信吉と金子美濃守に親しく交友している僧を探し出し、昌幸はその僧に近づき親交を深めると、沼田の城将の二人に、真田と手を組むように説く事を進めた。

その機が熟したところを見計らい、昌幸は沼田を攻めた。慌てたのは、沼田城を守る二人

であった。思いがけぬ攻撃に狼狽し、まず金子が昌幸のもとに降伏するため城を出た。その後、藤田も半月後昌幸に降伏を申し入れ、開城して城を明け渡した。城は真田のものとなったのである。翌年沼田平八郎が兵をおこし、沼田を奪い返そうと攻めてきた。

自分の先祖伝来の領地である。当たり前の行動であった。また金子美濃守は叔父であった。当然自分の味方になるであろうと思った。

沼田平八郎が攻め上ると聞いて、昌幸は一計を案じた。

「美濃守、叔父平八郎との戦はなしじや」

「何と仰せられる」

「戦は必要ない。かわりに喜んで城内に招きいれよ」

と、策を耳打ちした。

「これは考えも及びつかぬ事」

「お主にしかできぬ事よ」

金子は沼田平八郎の陣中に出向いた。

「平八郎殿、ご立派になられもうした。我ら城兵一同殿としてお迎えするのを待ち望み、耐えてこの城を守ってまいりました。真田に屈したのも、この日を待ち望み、やたら大切な兵を失う訳にもいかず、屈辱に耐えていた所存にござる。嬉しさのあまり、こちらまで参上した所以にござる」

と、金子は落涙しながら言上した。

「叔父上、叔父上の苦勞は露知らず。平八郎嬉しき限りでござる」

平八郎は叔父の言い分を全く信用し、沼田の城に無防備のままはいった。平八郎も叔父がいなかったら、信用しなかったであろうし、また慎重嫌疑の心が欠けていた。そこが昌幸の狙い目であったのだ。平八郎の首は瞬く間にはねられた。

昌幸が智略を尽くして手に入れた沼田城は秀吉の裁決で北条の城になった。北条氏は猪俣憲直に城代を命じた。昌幸にとって苦勞して手に入れた城を手放すのは、悔しい限りであったが、事を荒だてて、身を滅ぼすのは得策ではないと、ここは自重した。しかし、北条が仕掛けをかけてきたのである。

昌幸には沼田城から西北へ五^里ほどの所に名胡桃（ナグルミ）城があった。城代は鈴木

主水、城代格として中山九郎兵衛がいた。

猪俣は名胡桃が目の上の瘤であり、何とかして北条の手中に収めたかった。知恵を働かせて側近と謀略を練った。

「ご城代、よい手だてが浮かびましてござる」

「ほう、左馬介よい手だてと。申してみよ」

「はっ、実は番士の中に名胡桃の城代格中山と懇意のものがおりまする」

「それは？」

猪俣は身を乗り出すようにして聞いた。

「権田六兵衛なるものがおり、幼い頃よりの友とか」

「左様か、そいつは面白い。策を練るか？ちと耳を貸せい」

左馬介は猪俣の前まで進み、耳を近づけた。

「・・・これどうだ」

「それは名案でございます。早速六兵衛を呼び出しましょう」

左馬介は非常になっとくした様子で部屋を出ていった。

翌日、左馬介は六兵衛を呼び出した。六兵衛は夕刻左馬介の屋敷にやってきた。

「六兵衛、ご城代殿よりの頼みごとがある。やってくれるか」

「はっ、ご城代様の頼みごととあらば、いやとは言えませぬ」

「ならば、名胡桃の中山殿と懇意と聞いたが相異なるか」

「はい、よく知っておりまする」

「その中山殿に、城代の鈴木を亡き者にいたさば、貴殿が城代になること疑いなし、と伝えられよ」

「何と？某が中山殿に謀反をそそのかせよと」

「左様。ここは六兵衛殿に一肌脱いでもらわねばならぬ。やってくれるのう」

六兵衛はしばらく考えた後尋ねた。

「中山殿の命は保証していただきたい」

「無論その積もりでござる」

「ならばご尽力仕ろう」

六兵衛は中山に謀反をすすめることを承知した。後日、六兵衛は中山に使いを遣わし、

六兵衛は密かに中山の屋敷を訪れた。

「北条が某を城代にしてくれると」

「はい、この計略がうまく運べば名胡桃は北条のもの。さすれば、中山殿が城代でござる」

「誠か」

「猪俣殿の言動に嘘偽りはござらぬ」

「あとの手筈は某にお任せください。六兵衛殿」

中山は六兵衛を見送りながら、城代になる日の事を思い浮かべていた。

中山九郎兵衛は指示を受けた通り城の乗っ取りの準備を始めた。まずは主君昌幸の書状を捏造せねばならなかった。その為に過去の書状を見て必死に真似る練習をした。

一カ月後、中山は偽の書状を書き上げ偽の飛脚を仕立てて、城主鈴木主水のもとに届けさせた。書面は、火急の用件が発生したのでただちに上田城に登城せよとのことであった。翌朝、鈴木は従者を従え、名胡桃城をたち上田城に向かった。中山は城主の出發を見送った後ただちに早馬を沼田城に走らせた。沼田の北条方も事前に決行の日を聞かされていたので、乗っ取りの兵を率いて名胡桃城を目指していた。

鈴木主水は近習の者を数人連れた登城であったが、途中にある岩櫃（イワビツ）城に立ち寄った。城主は矢沢頼綱であった。

「矢沢殿、一瞥以来でござる。はや半年にならうか」

「おう鈴木殿、ひさしぶりでござる。果て、今日はいかなる事でお見えになりもうした」

「実は、上田よりご登城の呼出しが有りもうして、これより参る所存。その道中にて、矢沢殿の顔が見とうなりましての」

「左様でござるか」

矢沢は始め何気なく聞いていたが、話しているうちにどうもこの岩櫃のもとには、お屋形様からの手紙が来ていないことが解せなかった。

「どこかにお屋形様からの書状は紛れておらぬか」

「そのようなものはここ二ヶ月程は着ておりませぬ」

どうも矢沢は不思議でならなかった。上田城に伺候とあらば、まずはこの矢沢にも書状が届くはずであり、真田昌幸がそんな手ばかりな事をするのではないはずだと疑った。

「鈴木殿、その書状は所持しておりますか」

「無論、ここに大事に所持しております」

「拝見つかまつる」

鈴木は書状を懐より出して、矢沢に渡した。矢沢は書状を広げ、じっくりと書面を見た。

「ウーン、お屋形様の字と似ているが、本物か偽者か」

どうしても解せない矢沢はしばし考えた後、兵馬をつけて、名胡桃に向かわせることを進言した。

「もし、思い違いであればわしがお屋形様にお詫びすればよい」

鈴木は預かった兵とともに名胡桃城へとって返した。

一方、中山は北条方の到着を今か今かと待ちかねていた。中山は北条に幟は隠して城門までくるように伝えていた。中山は門番に味方であるから開門するように伝えた。北条は城内に入るやたちまち真田の兵を捕らえた。真田は武装する暇もなく全員が囚われの身となった。城には北条の旗印三つ鱗が翻った。

鈴木は馬を走らせた。やっと城が見えた。しかし様子が変わっていた。近づくくと六連銭の代わりに三つ鱗の旗印が目に見え付いた。遅かったのだ。騙されたのだ。無性に悔しかった。戦かわずして城を明け渡したことが、情けなかった。鈴木はそのまま寺にいき腹を切ってお屋形様にお詫びした。

「お屋形様に主水の無念の内を届けてくれ、頼む」

「委細承知。お主の無念晴らしてくれよう」

矢沢は血染めの無念の書状を上田城に送り届けた。

上田城に到着した矢沢頼綱は昌幸の前に伺候した。

「お屋形様、囚われてござる。鈴木主水自害して果てました。我ら急いで駆けつけましたが、名胡桃は北条のものとなってしまいました。手元の手勢だけでは要害の名胡桃は落とすのは困難、その前にお屋形様にお別れをと参った所存でござる」

「頼綱、お主の責任ではないわ。勝手な振る舞いは許さん。きっと内通したものがおろう。北条を手引きしたは憎き奴は誰じゃ」

「中山九郎兵衛でござる」

「中山とな。愚かなことを！」

信之の口から悔しさいっぱいの声が響いた。

「父上、すぐに名胡桃を攻めましょう。まだ、北条の兵は僅かです」

名胡桃の兵力は草の者により、だいたい揃っていた。

「そうじゃ父上、いまこそ北条を叩く絶好の機会」

信之は昌幸に進言した。昌幸はしばらく考えていた。そして口を開いた。それは想像していたのとは違うことであつた。

「ここは一つ考えがある。万一、ここで血気にはやり名胡桃を攻めれば、取り戻すのはたやすいこと。しかし、秀吉公は勝手な振る舞いは多分許さぬだろう。真田と北条を潰す格好の機会と思うに違いあるまい。ひとまず秀吉公に注進いたそう」

「この頼綱納得できません。拙者一人でもいき申す」

矢沢は立ち上がり座を外そうとした。

「頼綱、焦るでない。父上には考えがあつてのこと、それでも行くとあらば、この場で切らねばならぬ」

「ううー」

矢沢は拳を強く握り締め、また元の場所に腰を下ろした。

「この無念を晴らす時が必ずくる。その時に思う存分暴ればよからう」

誰を秀吉のもとに遣わすか稟議をした。

その頃、名胡桃城では、真田の襲撃があるかも知れぬということで厳戒体制に入っていた。名胡桃城は堅固な天然要害であるが、一番恐ろしいのは、北条にとってまだ勝手が分からず、そこを勝手知つたる真田に攻められれば、持ちこたえることは不可能だからだ。もし、真田が攻めてくれば北条の本隊が後詰めにはいる手筈になっていた。

昌幸は京にいる幸村を秀吉への使者として白羽の矢を立てた。この一時が勝負事だと感じたからである。大事なときの使者は血縁者が一族のものに限ると言える。で、ないと現

地での対応がおろそかになる恐れがあるからだ。遅ればそれだけ不利になるということである。昌幸は幸村へ急使を送った。その知らせを受けた幸村は従者二人をつれて早馬で大坂を目指した。昌幸は、小田原と浜松に草を走らせた。情報収集が大切と感じている昌幸の打つ手は、巧妙かつ大胆であり繊細でもあった。

幸村は大坂城へ到着すると、秀吉公への面会を頼んだ。秀吉は遠来からの客幸村と、早速城内に呼んだ。

「幸村、久しぶりじゃのう。息災であつたか」

「はっ、一瞥以来でございます。ご拝謁賜り恐悦至極にございます」

幸村は二間程離れた所で平伏したまま答えた。

「して、わざわざ参ったのは何事か」

「はっ、真田にとって一大事、いや天下平定をめざす豊臣家にとって一大事にございませう」

「何と、一大事とは聞き捨てならぬ。近う参り申してみよ」

「はっ、実は名胡桃の城が北条の陰謀により乗っ取られてしまいました。すぐに取り返すのが慣用かと物議をいたしました。ここは秀吉公のご裁許を賜ってからが常道とまかりこしました・・・」

幸村は秀吉の元へ近寄り、北条の名胡桃城乗っ取りの一件を子細に話した。

四 小田原

秀吉は幸村から事の始終を聞き激怒した。

「北条の田舎侍めが許せん。ただちに小田原に上洛して弁明いたすよう使いを出せ」

家康も北条氏直に次女督姫を嫁がせて姻戚関係を結んでおり、いわば同盟関係にもあったので、早速北条のもとに上洛を促す特使を出した。

北条氏直は天正八年（一五八〇）十九歳の時に家督を継いだ。だが、実質は父氏が実権を握っており、関八州を領土としていた。早雲以来強敵と戦い、領地を拡大してきた北条

にとつて見れば、豊臣秀吉怖るるにあたわずと思うのも無理からぬことであつた。ましてや、小田原城は上杉謙信や武田信玄の包圍をうけても頑丈にその城の威容を保ちつづけ、さらに今ではその城はさらに拡大し、町全体が要塞であつた。天下の名城に落城などありえず、秀吉がいかにも大軍を率いて攻めようとも、びくともしない自身があつた。

北条にも秀吉に対する過小評価があつた。成り上がり者の秀吉など眼中になかつた。天下の趨勢を見極める指導者がいなかつた。天正十六年の折りに、秀吉から上洛の督促を受けたときもそうであつた。

小田原城の評定の間に、氏政、氏直父子始め、一門、宿老松田憲秀、大道寺政繁ら二十数名が集合して、秀吉の上洛督促をどうするか議論が交わされた。のちにいう小田原評定の始まりである。

宿老の松田憲秀は、切れ者であり、天下の趨勢に敏感であり、今回の上洛督促はそのまま捨てておく訳にはいくまいと考へていた。北条家の中では孤軍奮闘である。

「御館様、ここは家康殿の口添えもありますゆえ、秀吉の元へ伺候いたすが、北条の為と考へまするが」

「何たる事！そのほうは、氏素性も知れぬ、猿の如き面構えの成り上がり者に、関八州を牛耳つてきた我らをして、一戦も交えず屈服せよと申すか」

氏政は怒号に近い感情で憲秀に言つた。

「屈服ではございませぬ。和を講ずるのでざる。秀吉は氏素生は知れぬとはいへ、今は関白太政大臣となり、朝廷を補佐し、天下の政務を司る地位を得ている者でございます。それに逆らうは、百年の社稷を危うくすることになります」

「忘れたか憲秀、その昔平家の軍勢十万余騎が、関東攻めの時、黄瀬川で水鳥の羽音に驚いて源氏の襲撃と勘違いの余り、算を乱して、逃げ去りおつた。上方の軍兵は大方そのよくな輩よ。しかも、小田原は天然の要害箱根に守られておる。上杉が武田がこの小田原を包圍したがびくともしなかつたではないか。何を恐れることがあるのじゃ」

「すでに関白秀吉は、その黄瀬川から西、四国、中国、九州までも支配下に収めておるのでございます。長久手で秀吉の軍を破つたお舅の家康殿とて、臣従を交わされております。上杉家、毛利家、長宗我部家、島津家いずれも軍門に下つております。それが、天下の趨勢であることを見極めていただきたい」

「秀吉など恐るるに足らず！いかなる大軍とて、この小田原は落ちぬ」

必死で訴える憲秀を援護する者など誰もいなかった。結局なにも結論が出ることもなく、そのまま情勢を見送ることとなった。

だが、二年も待たずしてその危機は再び訪れようとしていた。

天正十七年十二月、秀吉は諸国の大名達に北条討伐の軍令を発令していた。その軍令書が風魔衆の手により氏直のもとに届けられた。その内容は想像を超える規模であった。

「父上、この軍勢の数は誠にございましょうや」

「敵は関白秀吉、まんざらの吹聴でもあるまい。先の上洛の思し召しより刻はたち、用意周到な上で、この小田原攻めを決めたのでありましょう。しかし、西国の腰抜けどもが幾万とこようと東の武士はびくともせぬ。一門をすぐ集めよ」

氏政、氏直父子は本丸に一門、重臣を集めた。天正十八年の一月二日の事である。世に言う第二回目的小田原評定である。当然この軍令書が話題となった。その内容を簡単にしるそう。

- 一 蒲生氏郷、羽柴秀次、織田信雄、細川忠興らを大将とする主力十七万が東海道を北上。先鋒の大将は徳川家康。
- 一 前田利家と上杉景勝を大将とする東山道支軍の兵約三万。
- 一 大筒をそなえた数千の軍船は、九鬼嘉隆、加藤嘉明、脇坂安治等の兵約一万五千。
- 一 秀吉の旗本と予備軍一万余。
- 一 兵糧米二十万石。他に黄金一万枚。

軍議はやはり分かれた。出撃か籠城かである。北条の戦略は圧倒的に相手の兵が多ければ基本的に籠城策を取ると決まっていた。謙信の時も、信玄の時も籠城策を取り、たいした損害もなく、籠城策は成功を収めたといつてよい。しかし、今回はその時とは状況が全く違っていた。謙信も信玄も第一級の武将であっても、周囲を敵に囲まれ、長期戦を断行することが出来なかったのである。北城はそれに気づいていない。全くの過信がこの論議に結論を与えなかったし、行く末の方向を見誤ったといえる。

「このようなものはこけおどしでござろう。たいがい物見の報告は倍増するものでござる。多く見積もっても十万そこそこ見えよからう。箱根は天然の要害、こちらに入れば、地の利を生かして敵を粉碎するのめいと易い。西国の武士は恐るるに足らぬわ。一気に責め立て蹴落としてくれるわ」

「左様でござる。まずは、箱根で敵の出先を挫き、各支城を包囲している敵を本隊主力で蹴散らし、引いたところを城から討って出て、挟み撃ちにいたせば、敵は壊滅して退散するであろう。この際何を恐るるや」

しかし、宿老筆頭の松田憲秀は制するように力説する。

「かつて謙信が攻めて来た時、十数万の大軍にもかかわらず、びくともせなんだ。ましてやこの小田原はさらに堅固になり、壕をめぐらし、街全体が郭になっており申す。各々方、兵力の差は歴然としてござる。講和の時期を逸した今となつては、もはや難攻不落の小田原に総勢で立て籠もり、兵を損なわず固く守り、敵の疲労を待つしか手はござらぬ」

「尾張守殿、なんと気弱な言を申さるるか」

「いや止めぬ。わが城の総構えは東西五十町、南北七十町に及び、ここ数年で集めた兵糧弾薬は一年以上の備蓄がござる。間白秀吉は籠城戦にかけては他に引けを見せませぬ。

兵糧米二十万石は兵二十万人分の二百日分となり、金一万枚は米五十万石にも匹敵します。秀吉を甘く見てはこの戦負けることはあつても勝つことは無理というもの。北条の領地は膨大でござるがわが兵も分散してござる。ここは他は捨て全軍をこの小田原に籠城させるのが一番の得策と存ずる」

「それでは数多の城や民百姓は捨てると申すか」

氏長が聞いた。

「御意」

だが、主戦派の論ずるところもあり、氏政、氏長父子には結論が出せない。

なんの対策も講ずることもないまま、むやみに時だけがたつていった。

その頃、真田昌幸は出陣準備であわただしかった。

「父上！上杉景勝殿より先触れが到着し、明後日当領内に入るゆえに、すぐ合流されるようにとのことにごじます」

信之は父のもとに先触れの言上を伝えた。幸村は大坂より、戦準備のため帰国していた。

「いよいよ来たか。幸村を呼べ」

しばらくして幸村は昌幸のもとにやってきた。

「父上、お呼びですか」

「上杉殿からの先触れが来た。お前は明日にでも近習を率いて先に景勝の元にいき、挨拶いたせ」

幸村は以前人質の形で上杉家に身を寄せていたことがあった。

「はっ、景勝殿とは久しぶりの再会となります。明日を楽しみに出陣いたします」

「ところでだが、二人とも耳をかせ」

信之と幸村は昌幸に近づいた。

「此度の戦いで北城は滅びるであろう。それで、この国は秀吉のものじゃ。しかし、今は豊臣が天下を制してはいるが、その後はどうなるかは全くまだわからぬ。一番気がかりは家康じゃ。家康の腹の中は天下が必ずあるはず。くれぐれも家康の動きから目をはなすでないぞ」

「父上。今は関白秀吉公の天下。豊臣家で天下は安泰と思われませんが」

「いやいや、そううまくはいくまい。秀吉が万一亡くなれば、家臣は二手にわかれるであろう。そうなれば家康の出番じゃ。信之、そなたは徳川にとって大事なかなめ。ゆめゆめ徳川に忠義を尽くせ」

「父上、何をお考えで？」

「いずれ、わかるであろう。今は北条にとられた城を取り戻すまでじゃ」

翌日、幸村は先発隊として五十騎を率いて、上杉の陣場に馳せつけた。

先に出立した幸村は上杉景勝の陣中に伺候した。側には、直江兼次の姿があった。

「左衛門佐、久しぶりだのう」

「左近衛権少将殿、一瞥以来でございます」

「見ぬうちに一段とたくましくなられたのう。して安房守殿は息災でござるか」

「はっ、父昌幸は一段と意気軒昂でございます。此度の北条征伐の事、誠に喜ばしきことと張り切っております」

「誠に安房守殿はわが幕内にてなにより。万一そなたの父が北条が手先ならこれほど悠長にしておれぬわ。此度の出陣では愛刀を抜くことはあるまい」と言つて、景勝はアハハと笑つた。

「半日ほどして昌幸と信之が景勝の陣中に到着した。」

「安房守大義である。大手を振つて城を取り返すがよからう」

「これは、左近衛権少将殿、今回のお役目大義でござる。此度は思う存分暴れまするぞ」

「おう、望むところじゃ。十二分な働き期待しておるぞ」

「有りがたきお言葉。痛み入ります」

陣中では、出陣の酒が酌み交わされた。

翌早朝、真田を含む上杉軍勢は碓氷峠を目指して進撃を開始した。上杉軍のすぐ後ろを

小諸の松平康国、最後尾が前田利家軍である。総兵力三万五千にも達する大軍であつた。

碓氷峠には北条の見張りであろうか小人数がいるだけで、小競り合いもあつという間に終わり、大道寺政繁が守る松井田城を目指した。

大道寺氏は北条早雲とともに命運をともしてきた家柄であり、北条の譜代である。この大道寺が碓氷峠の東方に位置する松井田城の城将となつたのは当然ともいえる。松井田城は標高四百五十げに位置する平山城で、過去武田信玄が攻めたときも、数百の守兵で武田の軍を悩ませた経緯があつた。

「殿！物見が帰つてまいりました」

政繁は物見が帰城したことを聞いて、身支度もそこそこにして急いで出てきた。

「敵の軍勢は？」

「申し上げます。敵は前田利家、上杉景勝、真田昌幸、松平康国ら四万に及び、先陣は碓氷峠を越え、まもなくこの松井田城へ向かうものと思われませぬ」

「うーん、小癪な。一気に踏み潰す気か。そうはさせぬぞ」

「殿、いかなる策を？」

「敵は大軍。策を弄しても後詰めが見込めないとあつてはどうにもならぬ。籠城して敵の動きを封じて、少しでも小田原を助けるしかないであろう。よいか、源吾！決して討つて出ではならぬ」

「はっ、かしこまっついでさる」

一方、碓氷峠を越えた前田上杉軍は長い登山道で兵站が伸び切っていたので、一旦兵を集合させるため、軍義を開いた。前田利家、上杉景勝らは、松井田城を始め、周辺の箕輪、板鼻、安中、国峰などの諸城を一気に攻め落とすことを決めた。

真田昌幸は、前田利家の軍勢と箕輪城に向かい、信之、幸村は上杉軍とともに松井田城を取り囲んだ。

昌幸は八百の兵をもって松井田の西方一*の所に陣を構えた。右には前田家の富田左太夫の兵一千、左翼には松平康国の軍勢約千二百が囲んでいた。

「安房守殿、いかに攻めらるるや」

松平康国が聞いた。

「まずは、手はござらぬ。一度攻めて敵の手の内を見ぬと何とも言えぬ」

「安房守殿がそのように申さるるなら、明日にでも攻めてみますか」

「その気があらば、いかようにもご加勢申しあげよう」

昌幸は敵は多分最初は必死で戦う覚悟であろうから、攻めての被害も尋常でないことを自覚していた。この戦い、北条に勝ち目は絶対がない。全員討死にするか、降伏して開城するかしないのだ。昌幸はそれを当然理解していた。

翌日、松井田城の攻撃が始まった。

松平康国は攻撃開始の合図を行った。

「ワッー！」

松平隊の動きを見た前田隊は遅れては一大事と城門めがけて突入していった。

「殿、敵の攻撃が始まりもうした」

政繁のもとに報告がもたらされた。

「敵は多い。できるだけ引き付けて狙いをつける。雑兵には構うな」

「はっ」

立て籠もる北条勢はできるだけ城壁近くまで寄せるのを待ち構え、鉄砲と矢を雨霰と打ちかけた。寄せ手の松平隊と前田隊はあまりにも多い矢と鉄砲に死傷者が続出した。

「このままではいかん。引きあげい！」

引きあげにかかったが寄せ手としてはこの時点が防備が弱く、士気が衰えているので一番危ない。ここをやはり大道寺政繁はついてきた。城門を開き屈強の者約二百名が大軍の只中にうって出た。しかし、追う側は少なく、追われる側は十倍以上である。戦いとは時として数字だけでは表せない心理が大きく左右する。

「蹴散らせ！」

一部の武將はこの状況を見て、退却をやめ立ち向かおうとした。

「北条が打って出たぞ！立ち合え候へ」

松平の家臣矢部甚伍はこのまま黙ってしりぞくのは徳川の名折れと感じ、その場に踏みとどまり北条と刃を交えた。

「皆の衆松平の臣、矢部甚伍！この戦い振り後々までの語り草に致せ！」

矢部は見事に奮戦し、二人を討ち取ったのち、北条方の武將太田左門に討ち取られた。

北条勢は嵐の如く通りすぎていった。北条の戦死者僅か八名、松平の戦死者は三十名に

も達した。この攻撃で松平と前田の戦死者は約百五十にもなった。松平康国は面白くなかった。なにかと言えば、真田が全然動く気配を見せなかったからである。

「安房守は何を考えておるのじゃ。じっと眺めておるだけじゃ。すぐ使いを出せ」

「はっ」

「お屋形様、松平殿は北条にうまくあしらわれたようです」

「大道寺政繁をあまくみとるな。ここはじっくり攻めるのが得策じゃ」

真田昌幸の陣中に松平から使者が馳せつけた。

「お屋形様、松平殿よりの火急な使いでござります」

「やっばり来たか。通せ」

険しい顔つきをした武將が昌幸の面前に伺候した。

「松平家家臣戸田将監と申す。主の言上を安房守殿にお伝え申さんが為、罷りこしまして

いひる

「何でござろうか。何なりと」

「安房守殿におかれては何故松平前田とともに松井田を攻め落とさぬのか、合点がいきま

せぬ。いかなる所存か」

「左様なことでござるか。康国殿に伝えられよ。我真田が加勢せぬのは、勇猛果敢なる松平家をもってすれば、わが真田の力を借りなくともたやすいと思つたからじゃ。他意はない。次は必ずご加勢申し上げます」

こう言われては使いの者も二の口が出ない。

「安房守殿の存念よくわかり申した。帰つて主に伝え申す」

康国は将監から昌幸の口上を聞いた。一杯食わされた形であつたが、昌幸の力を借りなければ落城の見込みは立たないのも事実であつた。戦の駆け引きは、歴戦の昌幸が一にも二にも上手であつたからだ。

秀吉からも、早く落城させるよう督促が出されていた。が、軍議の結果長期戦となり、秀吉も敵の頑強な抵抗を感じたのか。じっくり攻めることを認めた。城に対する攻撃も威嚇を加える程度で進展は見えないように見えたが、城の内部では籠城に対する不安、将来への望みがない不安が城兵の心を蝕み始めていた。

昌幸はこの心を読んでいた。まさに出番であつた。

その頃、昌幸の子信之と幸村は松井田城から二里程東にある安中城を取り囲み攻撃していた。総勢は五百であるが、六連銭の旗印は、守っている城兵からは地獄への渡し賃のように思えた。安中城の防備は薄く、守兵も約三百であり、占領するにたいした事はなからうと思つていたが、油断は大敵である。攻めるのは他に上杉勢約千二百である。

「兄上、いかがいたしましたようや」

「うん、城に向かい鉄砲と火矢を打掛て、騎馬で突入するとみせかけよう」

「それは妙案！早速運びましょう」

「よし、馬を引いてまいれ」

幸村は不思議そうな顔をした。

「兄上、このような役目この幸村で充分でござります。兄上はとくにご観覧あれ」

「ふふ、幸村の腕前、高見の見物といったそう」

鉄砲隊と火矢を持った雑兵を城壁近くまで前進させ、幸村は騎馬二十騎を率い、六連銭

の旗印を高々と揚げさせた。

「よし、かかれ」

鉄砲が放たれ、火矢が放たれた。続いて、幸村の騎馬隊がさっそうと城門へ向かって走りだした。今回は上杉の将兵も成り行きを見守っている。

「ウォー」

城門まですぐである。反撃がなくてもあつても威嚇だけであり、踵を返すつもりであった。しかし、予想に反したことが起こったのである。

城では城代の野田与兵衛が侍大将各の三人とどうするか思案にくれていた。守る兵は三百といつても二百は駆り集めた雑兵であり、専門の兵はたった百である。ここで潔く全員討死にするか、降伏するかである。困む敵は最強の上杉と真田の軍である。戦つたところであつという間に落城することは目に見えている。野田としても、農民兵をみちずれにするわけにはいかなかった。野田は決心を固め、降伏する事を打ち明けた。

「皆に伝えてくれ」

「はっ」

その時である。真田の軍勢が動きだした。

「ご城代！真田が動き出しましてござる。城に向かってござる」

「おうー、遅かりしか」

皆を制するように野田が言った。

「いや、まだ手だてがあるはず。あわてるでないぞ。皆に伝えよ。決して手を出してはならぬと」

「はっ」

野田は迫りくる真田勢を見た。その数はすくない。もう一方の上杉勢を見た。上杉勢は戦の準備もせず、見ているように見えた。野田は年の功というか、状況を見極めた。これは威嚇だ。よし、まだ間に合う。

「よし、騎馬隊が城門近くまできたら、踵を返して退くであろう。その時に城門を開け

い」

幸村は城側からは何も反応がなく、間々ならぬものよと思いつながら、ふとこのまま城内に突入してしまおうかとも衝動にかられたが、犬死にしてもならぬと思ひ、引き返すよう命じたその時、城門がギーという音とともに開いたのである。驚いたのは、真田の方であった。この後パニックに陥らず平静で行動できたのも真田であったからかも知れない。でも、開いた瞬間は城兵が死にも狂いで討つてたものと身構えたが、城門に立つ武将と飛んできた矢文から、ただならぬ事は察知した。

足軽がその矢文を取り上げ、幸村に手渡した。幸村はその文を馬上で読んだ。それには城代の切腹をもって、城兵と家族一同の命を助けて欲しいとあった。それならば、この城を明け渡すという降伏文であった。幸村はその文を手にしたまま、城門へと駆け出した。びっくりしたのは真田の兵である。万一の事あらばと身構えた。

「野田与兵衛殿！真田左衛門佐幸村でござる。しかと承つてござる！」
と言いつつ、掛け戻り、隊列を整えて信之の陣所へ立ち戻った。

幸村は信之に懐より矢文の文面を見せ、上杉にも降伏開城の意志のあることを知らせた。

軍議の結果、城兵家族には委細構いなしと決まり、安中城城代野田与兵衛の切腹の件も沙汰閣となったが、野田はその沙汰を聞く前に割腹して果てていた。

真田兄弟は、北条家はよい家臣に恵まれておると感じていた。そして、戦も長いものになるやも知れぬと感じていた。

松井田城を真田昌幸の智略に委ねた前田、上杉軍は既橋城や箕輪城などの諸城の攻撃に向かった。昌幸は兵糧攻めは時間がかかり、下手をすると秀吉の怒りを被るかもしれない恐れがあり、ここは勧誘の志で揺さ振りをかけて見ようと考えた。それも城将大道寺政繁直々にである。だが、敵中懐深くある武将にどう伝えるかである。

「佐助はおるか」

「はい、こちらに」

と、云うや佐助は何処からともなく昌幸の近くに伺候していた。

「相変わらずすばやいのう」

「信之様幸村様安中城を陥れてございます。六連銭の旗印を見て敵將が降伏を申し入れた

のでございます」

「ほう、戦わず城を手に入れたか。それも一興よ」

「して佐助よ。お主は百姓に成りすまし、松井田に忍びこんでまいれ。多分地元の百姓とは兵糧の受け渡しを闇に紛れてしておるであろう。大道寺に近づき、降伏の意思があらば明後日日没までに狼煙を上げられるようにと。城兵家族のものの命は昌幸が必ず保証いたす。これを渡すがよい」

と、昌幸は書状と狼煙を渡した。その狼煙は真田家が使うものであり、降伏するの意味する赤い煙が出るように仕掛けがしてあった。

「はっ、必ずや大道寺殿に届けます」

佐助は夜の帳が降りると、百姓姿に見を変えて、仲間の健太を百姓仲間として従えて、城の裏手側へと向かった。今日は月明かりはほとんどなく、暗くて顔もはつきり見えな

い。
薄暗いが数人の百姓姿が兵糧と思われる物を担いで歩いているのが見えた。当然、佐助たちも兵糧を色々と担いで持っていた。

しばらく進むと松明を持った雑兵が三人ほどこちらへ歩いて来るのが見えた。

「おい！止まれ」

静止を命ずる声を聞いて、佐助たちは立ち止まった。

「どこへ行く？」

松明を佐助の顔が見えるように近づけた。

「へい、城に兵糧を届に参ります」

「兵糧か？もう少し向うだ。この辺りをうろつくと敵と思うて殺されるぞ」

「それは申し訳ねえ。だけど、酒も持ってきたぞ」

「おう、酒も持ってきたか。城内にいかぬうちにわしらの腹の中に」

「それもよからう。おい酒を飲ませろ」

「へい」

と佐助は荷の中から酒徳利を出した。当然すばやい動作で中に眠り薬を入れていた。

雑兵らはゴクリゴクリと酒を飲んだ。

「いやー、旨えーなー、たまらんなー」

三人で廻し飲みをした徳利は一気になくなった。

「もう終わりか。他に酒はないのか！」

「へい、それだけで」

「えいまあよいわ、さっさと行け」

しばらくすると三人は気分がよくなったのか、道中で眠たいとぶつぶつ云いながら倒れ込み眠りに就いていた。

佐助と健太は城内にまんまと入り、食料を置くと、侍が違うほうを見ている間に行方をくらました。

「あいつらどこへいった？まあいいか」

二人は大道寺政繁の居場所を見当をつけながら探した。しかし、確定した所は今一つはつきりしない。

「健太、例の手でいこう」

「はい、では某がさわぎを起こしている間に」

二人はお互いの顔を暗闇の中で見て頷いた。健太は突然大声を出した。

「曲者だ！曲者！」

慌てて武士や雑兵が起き上がり、かがり火の数を増やした。

「何事だ！」

大道寺政繁と覚しき武将が顔をあらわし、側近に聞いた。

「何やら曲者のようですが、どうやら何かと間違えたようで」

「左様か？用心にこした事はない。注意いたせ」

佐助はその姿を物陰より見てニヤリと微笑んだ。屋敷の中に忍び込んでいった。寝かかった政繁は人の気配を感じていた。

「そこにいるのは誰じゃ」

「大道寺殿とお見受けいたしますが」

「いかにも。殺りにきたはけではないな」

「あまり声をださぬように。真田の使いでござる」

「真田と、安房守の使いとな」

「これを渡すようにとの事」

と云うや大道寺に書状を渡した。

「安房守殿の思惑読まずともよい。北条の力必ずお見せいたそう」

と、政繁がつぶやいた頃にはもう佐助はそこにいなかった。

翌朝、書状を見ることはないと思っていた政繁は、いつのまにか書状を広げて読んでる自分に気がついた。でも、そこには自分の思いとは別の事柄が記されていた。

さて、目を転じて豊臣秀吉率いる主力の動きを見てみよう。徳川家康が先鋒で約三万の軍勢を率いて駿府を出発し、続々と諸大名十四万の大兵力が東海道を東に向かっていった。最後に秀吉が三万余を率いて集結地沼津に集まった。

長久保城で軍議を開いた秀吉と家康は、山中城と菫山城を攻略することに決定し、軍勢を二手に分けて攻撃に向かわせた。

山中城と菫山城は北条氏の西の最前線であり、小田原を守る箱根の重要な防御施設であり、突破されればそこはもう小田原城の周辺であった。その為、山中城には松田憲秀の甥康長が入りその数約四千で守りにっていた。菫山城には氏直の叔父氏規以下三千六百を置いて豊臣軍を迎え撃つようになっていた。

数多い北条の支城の中で、他の城が三百から二千の城兵だったことを考えれば、いかに重要な地点であったかと理解できよう。箱根を突破されれば喉元に刃を突きつけられたと同じことである。是が非でも豊臣軍の行動を阻止せねばならないと感じていた。その思いが兵力の分散化を招き、小田原の弱体となっていた。小田原城の総構えは広大であり、元々大兵力を要して籠城して戦いに望むのが常套手段であり、過去の武田と上杉との戦いとは構えが違っていたのである。北条の思惑は箱根での豊臣軍の足止めにあった。

しかし、天然の要害も圧倒的兵力にあっけなく落城してしまう。三月二十九日未明、豊臣軍七万余が山中城を囲み、攻撃を始めた。北条側は勇猛果敢に戦うが、次々と新手を繰り出す豊臣の大軍のまえに、半日の後に松田康長を始め北条軍のほとんどは討死にして落城してしまった。菫山城には四万五千の兵力で包囲し攻撃を開始したが、こちらは巧みな北条の攻撃で容易には落城せず、寡兵をもって多勢を防ぎ、陥落したのは六月の下旬であった。

箱根を越えた秀吉軍は四月六日に湯本の早雲寺に本陣を置いた。もともと北条との戦いは長期戦と考えていた秀吉は、小田原城を直接その目で見てその覚悟を新たにされた。

「さすがは、關八州を治める北条の本城じゃ。見事な城構えだ。かの上杉謙信も武田信玄を持ってあましたそうだが、想像以上の堅城じゃ。ここはじっくりと攻めようぞ」

そして小田原の西に小高く聳える笠懸山に城を築き始める。その城は突貫工事として六月二十六日に完成する。一夜城の呼び名は、城の完成した後で、前面で目隠しの役目を果たしていた杉林を切り倒して、小田原の城兵に幻の如く現れた壮大な城を披露したために命名された。北条側は仰ぎ見る立派な城に驚愕するとともに秀吉の化け物さを感じていた。

四月二十一日には小田原城の重要な支城である北条氏勝が守る玉繩城が降伏開城し、江戸城、河越城、松山城など重要拠点次々と秀吉の軍門に下っていた。五月には堅固な城で西国に名を知られていた岩槻城が陥落した。小田原の支城ネットワークの重要拠点は徐々に失われていった。小田原の広大な総廓は並大抵では陥落させることができないが、その存続の是非は、北条がつくりあげた多くの支城の支えで持ちこたえることも事実である。しかし、豊臣の大兵力の前には兵の分散が逆効果となり、過去の小田原を巡る二度も的大包囲網での勝利は、今回は参考とはなっていないかった。

秀吉は、過去二人の偉大な武將が小田原を攻めあぐねたことを十分に知っていた。だからこそ、外回りから攻めたのだ。氏政・氏直父子にもたらされる報告は、いつも不利な戦闘の結果の報告であった。一度も野戦ともいえる一大決戦の戦いがないまま時だけが過ぎていった。そして、もう一大決戦が仕切れるだけの余裕もないほど、兵は分散しており、弱体化が進んでいた。

刻を戻そう。上杉、前田、真田の軍勢は松井田城を除いて順調に北条の城を攻略していた。大道寺政繁は昌幸からの書簡を受け取ると、じっくりと手にしたまま思案に暮れていた。気がつけばもう夜が明けていた。

（わが城の兵はよう戦った。大軍相手にかように戦えば誰も何も言うまい。これ以上戦っても無益な血を流すだけじゃ）

政繁は決心を固めた。

「太一、皆を集めよ」

しばらくして主な武将が城内に集まった。

「大道寺殿、いよいよ決戦でござるか」

「左様、われら東国の武士、底力を見せてくれよう」

政繁は皆頼もしいものよと思ひながら、手で意見を制した。

「お主達の気持ちはようわかる。だが、この政繁、皆を無駄死にさせるわけにはいかぬ。わが命と引き換えに、城を明け渡す所存」

「何と？なんと申さるるか。われらの命もう捧げており申す。今更生き恥をさらしたくはござらぬ。されど、開城するというなら某もこの腹切りまする」

「そうじゃ、政繁殿」

政繁は一刻以上も説得を続け、ようやく武将らも承諾した。夕刻、赤い狼煙が城内より立ち昇っていた。

「お屋形様、赤い狼煙があがりましてござる」

「うん」

しばらくすると、城門が開き一騎がすばやく躍り出て、真田の陣所へ駆けてきた。

「真田安房守殿にお目道理願いたい！某、松井田城大将大道寺政繁なり」

敵の大將と聞いて、真田の陣所はどよめいた。赤い狼煙は昌幸と側近の者しか知らないものだったからだ。

「お屋形様、大道寺政繁殿自ら参りましてございます」

「おう参ったか。こちらへ手厚く通せ」

政繁が昌幸の前に伺候してき。

「安房守殿、わが城真田に明け渡し申す。但し」

「但しとは」

「我首と引き換えに城内のすべての者の助命を願いたい。この願い聞き入れなければ、即刻立ち返り皆討ち死にする覚悟でござる」

「何と？脅しのつもりか」

側近の唐沢玄蕃が頭に血が上り口を挟んだ。昌幸は玄蕃を制して言った。

「委細承知仕る。今度はわしから大道寺殿への頼みを聞いてもらいたい」

「三途の川を渡る拙者に何の頼みでござろう」

「閻魔大王に捧げる命、一端このわしに預けてくれぬか」

「？な、何と。拙者に真田の先鋒になれども」

「左様。三途の川は後でも渡れよう。武士の命一つでも助けとうはないか」

「されど、わが首は北条に捧げても同然でござる。人の命は助けたくとも、わが命惜しうござらぬ」

「だが、大道寺殿が先鋒に立てば、北条の戦意も消失するであろう。開城する城も多いと存ずる。無駄な戦いで死は、必要ないと存ずる。秀吉公の相手になる武将はどこにもおらぬ。その命助げたいとは思わぬか」

「それほどまでに安房守殿が言うならば、御意のままにいたしましょう」

こうして、松井田城は開城し、城内の侍と徴兵されていた農兵はなんの処罰もなく開放された。政繁は北条から真田の武将となった。

前田、上杉両軍は南下を続け、武蔵国に入り北条の城を順調に攻略していった。真田軍も国境を越え、松山城へ向かった。

秀吉が小田原に着陣すると、真田の忍びも活動が活発になった。佐助は昌幸の密命を受けて輩下の者十数名を引き連れ、秀吉と家康の陣営にもぐりこんでいった。佐助は三分の二を秀吉家陣営に忍び込ませ、残りは小田原城内への侵入にあてた。小田原で気を付けたのは、風魔一族であった。小太郎を首領とする風魔一党は東国では名だたる忍び軍団であり、要注意すべき敵であった。事実、佐助は後に小太郎と覚しき忍びと出会っている。佐助は家康の陣営に忍び込んだ。仁助は三人を連れて小田原城に向かった。仁助は夜に成ると、小田原城に侵入を図った。城内といつてもまだ外堀であり、内堀にかけては警戒が厳しくなかなか侵入の機会がなかった。

「おい仁助、あそこを行く葉屋おかしいとは思わぬか」

「うんわしも先刻から気になっておる」

「忍びか？」

「であるうな」

「後をつけてみるか」

仁助らはその葉屋の後をわからぬように追った。しかし、しばらく行くと辻で曲がり姿

が見えなくなった。仁助らは足早に辻を曲がり姿を確認しようとしたが、その姿はどこにもなかった。

「しまった！」

相手は気がついていたのである。しかし、もう遅かった。三人は少し行った所で周囲を見渡したが、やはりどこにも形跡はない。仁助は足跡を探した。その時複数の影が目に入った。

「何で後をつける。どこの者だ！」

と、葉屋は聞いた。

「・・・」

「豊臣の忍びか？やれ！」

合図を送ると、一斉に刀を抜き、亡き者にしようと思いかかった。

「ここはわしが引き受ける。後は頼む！」

というが早いか、仁助は懐剣をさっと出して、敵に向かっていった。

「仁助一人にはしておけぬ。五郎よお前は佐助の所へ」

「ウッ！」

という声を残して寛太はその場から立ち去ろうとした。そうはさせじと風魔一党と思われる忍びの一団は寛太を追うが、五郎が行く手を遮り寛太は逃げた。

仁助は一人を倒したが、足と額を傷つけられ、充分に動けなかった。そこへ五郎が現れた。仁助を何とか助けようとしたが、敵の数は八人にもなっており、逃げ切るには不可能と思われた。仁助は一人を羽交い締めにしたが、後ろから袈裟懸けに切られた。しかし、仁助は手に持った爆薬に点火していた。

「伏せろ！」

ババーン！仁助は敵一人を抱いたまま爆死した。

「にすけー！」

その時である。手裏剣が頭上を飛び越え、風魔一党の数人を倒した。敵はひるみ手裏剣の飛んできた方向を見た。そこには、見覚えのある姿―佐助―が数人の仲間とともにいた。佐助が右手を振ると、敵に襲い掛かり形勢はもはや逆転していた。

「引けッ！」

敵の残っているのは三人だけであった。佐助は輩下のものに引き揚げの合図を送った。
「佐助、すまぬ」

五郎は佐助に仁助を失ったこと、手を煩わしたことを、北条の情報を収集できなかったことを言葉少なにわびた。佐助も十分にわかっており、もうそれ以上言わなくてもよいと頷いていた。佐助は心の中でやはりこの任務は自分がやればよかったと後悔していたが、もうあとの祭りであり、風魔の警戒は厳しくなり侵入は諦めざるをえなかった。

同じ頃、豊臣方の陣中に潜入した佐助の輩下の何人かは情報を収集していた。特に家康の回りは念入りに調べを始めていた。

五 関東平定

大道寺の先導で松山を包囲した前田、上杉、真田の軍勢は二日でこの城を攻略開城させ続けて忍城へと鉾先を廻らせた。この忍城は湿地に囲まれ、騎馬での一気攻めは不可能であり、攻略するには一本の道だけであり、攻撃は困難だと思われた。また、この城の攻略には、豊臣本隊から石田三成を大将とする軍勢が馳せ参じ、指揮をとることの軍令が伝えられた。

三成はこの湿地に囲まれた状況を実際にこの目で見て、ふと秀吉が備中高松で見せた水攻めを思い出して、その策をとり水攻めで落城させようとした。農民と雑兵を役役して堤防を築いていき、後は頼みの雨を待つのみとなったが、降り出した雨は止まず、逆に堤防の突貫工事が災いして、堤防が崩れ濁流が豊臣軍を襲い、多くの溺死者を出した。

昌幸はこの様子をほくそえんで眺めていた。三成の脆弱さを垣間見た感じであり、秀吉の側近の第一人者としては役不足を痛感していた。やはり三成は戦巧者としての資質に欠けていることを感じた。

小田原の北条氏の元へは落城する城や開城降伏する城の報告があいつぎ、残る城は寡少となっていた。このままでは過去に上杉や武田の猛攻をしのいだ難攻不落を誇る城でもそうもちこたえられるものでなかった。頼みとしてかすかな望みを抱いていた東北の諸大名も続々と秀吉に誼を通しており、このまま籠城を続けるのは後詰めがいなければ勝利を見方につけるのは不可能であった。

六月に入ると再度小田原城に重臣らが集まり、軍評定が行われた。三回目の降伏か徹底抗戦かの評定である。しかし、だれも和議に向けての解決策は論じることなく、あくまで抗戦論が座を占め、小田原城内は落城あいつぐ城にどう手も出せず黙ってみているしかなかった。兵を集めて豊臣軍に刃をむける勢いは今の北条には欠けていた。

筆頭家老の松田尾張守憲秀はこの評定の場では何も口に出さず黙って聞いていた。それに軍議としては幼稚きまわりなく、初代早雲ならこのような無様な仕儀にはならぬであろうに思っていた。憲秀は戦うことよりも和平に尽力をそそぐ事を心に決めていた。今なら北条の家を存続できるぎりぎりの所だと感じていた。そのために忍びの者を使い、豊臣の陣営に親書を遣わしていた。その相手は秀吉の第一の軍使黒田官兵衛であった。

「殿に北条から使者が参っております」

「北条？だれの使いじゃ」

「さて？殿に直接会いたいと願っております」

「どれ、会ってみるか」

官兵衛は腰を上げて使者が控える陣幕に入ってしまった。本来なら使者を官兵衛のいる陣所に通すのが筋であるが、官兵衛はさすがに用心深く、陣所がわかって襲撃を受けないためにもあえて出てきたのである。

憲秀からの親書を受けとった官兵衛は封を切り中の内容を改めた。そして読みながらうんうんと頷いていた。官兵衛はしばらく間を置いてから伝えた。

「尾張守殿にこう伝えられよ。無血開城に応ずるならば、城主・一門、重臣に死罪なし。もちろん将兵は無罪放免。ただし、関八州は没収したうえ、改めて伊豆・相模両国が安堵されるであらう」

「そこご処置。間違いなからうか」

「この官兵衛約束の違い事はせぬ」

「はっ、それではしかと主殿に伝えまする」

使者は脱兎の如く憲秀の所に帰りこの口上を伝えた。

「それは誠か？」

「御意」

「豊臣秀吉の聞いた上でのことか？」

「いや、某の前での即口上ゆえ、官兵衛の一存かと」

「官兵衛は秀吉の右腕ゆえ、まんざらでもかせでもあるまい。一度氏直殿に直訴いたそう」

その数日後、官兵衛の陣から矢文を携えた雑兵が、密かに北条の陣営に近づき、矢文を放った。それは二、三箇所で数日に渡り続けられた。

「曲者じゃ！ 矢文が投げ込まれてござる」

中を開いてみた将兵は内容に驚愕した。これは、一大事だと思った三浦将監はその文を持って評定衆の山角上野介の元へ走った。

「このような文が我陣営に投げ込まれもうした。いかなる仕儀かと思ひ、上野介の元へ馳せ参じた次第でござる」

その文を見た上野介の眉が引きつった。

「噂は事実であったか」

「何と？ 筆頭家老が裏切りを？」

「うん、ここ最近筆頭家老が何やら企みをたてているという風聞が流れていた。これで間違いないわ。主家を売るとは許さん」

「ここには、他にも豊臣に味方する者がいると」

「筆頭家老を捕らえれば一網打尽も同然」

上野介はこの事を氏政に訴え、奉行衆が松田憲秀を捕らえ、地下牢に幽閉した。じわじわと北条の内部の結束は破れつつあった。これこそ官兵衛の待ち望んでいたことであった。

官兵衛は秀吉の本営を訪ねた。秀吉は上機嫌そんな顔で官兵衛を迎えた。

「官兵衛よう来た」

「ご機嫌麗しゅう存じます」

「うん、官兵衛手筈は整ったようだが」

「御意、委細ばかりなく進んでおります。そろそろここが潮時だと」

「さすが官兵衛よ、あとは諸大名がいくつ首を持参いたすかだ」

「その時が待ち遠しく感じます」

官兵衛は話しながら、秀吉はやはり恐ろしい人だと思った。官兵衛はこの策を使うのは進言したが、存命が条件で引き受けたのだ。だが、もはや秀吉の方針は北条家の取り潰しであったのだ。秀吉は天下を手に入れたときから、その行動は信長を上回る傍若無人ぶりであり、官兵衛もその蛮行爲にはうなずけないものがあつた。しかし、軍使官兵衛にとつてはやらなければならぬ仕事であつた。

その頃、昌幸の陣中に佐助が帰つてきた。

「佐助ご苦労であつた」

昌幸の隣には信之と幸村も腰を下ろし、今後の動向を話しあつていた。

「お屋形様、まもなく小田原は開城する様子」

「北条に動きがあつたか？」

「いいえ、秀吉公の策にございます。北条の松田尾張守の内応が暴露されて幽閉の憂き目にあい、北条家の内部は分裂状態に陥り、その隙をついて和平の話を持ち掛けてございます」

「父上、北条はどうなりましたか？」

信之が険しい顔付きで昌幸に聞いた。少し間があつた。

「秀吉をあまく見てはならぬ。無血開城であれば籠城する将兵の命は保証されようが、氏政を始め一族は領地を没収の上死罪となろう」

「父上、しかし氏直の舅は家康殿であれば、氏直の命までは奪うまい」

「それはわからぬな。死罪は免れようが追放されるは必定じゃ」

「かような仕打ちならば、きつと深く城を枕に討死にしたほうがよかろうに」

幸村がポツリと武將としての意識をもらした。

「そのような仕儀にはなかなかなれるのが氏長の弱み。関八州の広大な領地を手に入れれば、守ることだけが必死で先を見失うのです」

七月五日、北条氏直は家康を通じて和平の意志があることを伝え、弟氏房を伴い滝川家の陣所を訪れ、自分が全責任を追い切腹するので、城中の将兵は助命して欲しいと嘆願し

た。この報告を受けた秀吉は直ちにこの申し出を認め、小田原の無血開城は成立した。ただし、秀吉は北条氏政、氏照と重臣松田憲秀と大道寺政繁には切腹を命じた。

氏直は助命され、高野山へ追放となり、僅かな家臣らとともに赴いた。

氏政は七月十一日に切腹して果てた。早雲が辛苦の上築いた王国は、五代で滅亡したのである。

辞世の句は

雨雲の おほえる月も 胸の霧も はらたにけりな 秋の夕風

であった。

栄華を誇った坂東の覇者北条王国は滅び去った。

六 家康と秀吉

秀吉は小田原の戦役後に大規模な論功行賞と領地替えを行った。家康には北条の領地關八州を与え、旧領の三河、遠江、駿河、甲斐、信濃の五カ国は召し上げてそれぞれ他の大名に与えられた。秀吉にとつて家康の力と財力は侮りがたく、関東へ追いやることによつて勢力の削減を狙ったものであった。特に三河、遠江、駿河の三国は長年治めてきた土地であり、結びつきが堅固であったので、切り離すいい機会であったからだ。

一方、昌幸は本領はそのまま安堵され、沼田の地も真田の領地と認められた。

秀吉は大阪へは帰らず、さらに北の奥州仕置きに下向し、奥州の諸将は安堵や所領没収の憂き目を見た。

昌幸らが沼田に凱旋したのは天正十八年の冬であった。しかし、忍びの者は家康と秀吉にそのまま張り付き、大阪と関東にそれぞれ随行し、監視を続けることを命じられた。

沼田では昌幸の正室山之手殿が長い戦をねぎらうために出迎えていた。

「ようご無事でお帰りなされました」

「そなたも留守大義であったのう。おかげでこの領地も城もそのままぞ」

「それは目出度きことにごさいます。戦勝の杯を用意させましたゆえ、ご堪能あそばせ」

「うん、今宵はゆるりと飲もうぞ」

昌幸は甲冑を脱ぐと酒肴が用意してある広間へと向かった。信之と幸村も席についてい

た。重臣ら十数名も同座していた。

「お主達は、もう来ておるのか。においを嗅ぎ付けるのが早いことよ」

「お屋形様、われら戦にはもう駆けつけませんが、こちらにはすぐ駆けつけまする」

重臣の横谷左近が杯を手にして飲む振りをしながら言った。

「わはははあ。左近殿同感でござる」

座は笑いで和んだ。

しばらくして幸村は京都へと向かった。もちろん昌幸の名代もかねており、秀吉への御礼言上とご機嫌伺いである。一方、佐助らは家康の行動を追い、江戸へと足を運び、城地選定や家臣の動きをしばらく監視したあと、上田に戻り昌幸に報告した。

「お屋形様、佐助が戻りました」

「うん、すぐここに参る様伝えよ」

「はっ」

しばらくして、隣接する部屋に姿をあらわし、平伏していた。

昌幸の側には信之が同席していた。

「佐助、久しぶりじゃのう」

「はっ、お屋形様無事戻りましてございます」

「そこではよう聞こえぬ、もう少し近こう寄れ」

佐助はぐっと近くによった。

「狸は関東でどうしておる？」

「はい、江戸城を本城と定めたようで、あたり一面の埋め立てをしております。城も道灌のものは打ち壊し全く新しく大きく大きな縄張りしております。気になるのは秀吉に心寄せる諸大名の一部が与力している点でございます」

「ほう、大阪方の大名が古狸を援助しているというか」

「御意」

信之が片方の眉を釣り上げて聞いた。

「・・・これは面白い」

昌幸はニヤリとしながら黙って聞いていた。

一方、京についた幸村は秀吉へのお目見えを三成を通じて行い、しばらくして聚楽第でのお目見えにありついた。

「幸村、遠路大義である。しばらくじゃのう」

「本日はお目通りを賜り恐悦至極に存じ奉りまする」

「うんうん、関東での働き様父子ともども聞いておるぞ。誠に立派であった」

「ありがたきお言葉にございます」

「ちと顔を見せよ幸村」

幸村はたれていた頭を上げて秀吉を見た。

「大事な話がある近こうへ」

「はっ」

幸村は秀吉と眼と鼻の先まで歩み寄った。

「実は近々高麗の地に攻め上ろうと思っておる。行く末は唐天竺まで上るつもりだ」

「高麗に攻めると？」

幸村はその話を聞きしばし茫然となった。秀吉という天下人は日本だけでは飽き足らず高麗や唐国まで攻めようとしている野望を聞き、己の野望の小ささに気付くとともに、その妄想とも言える壮大な構想を関心しながら聞いた。

実際、秀吉の心中にはキリスト教布教からくるスペインなどが領土掠を行なう懸念があった。当時、ポルトガルとスペインはサラゴサ条約を結び、東西に分ける境界線を引いて領地争奪の状態にあった。しかし、黄金の国ジバングは、宣教師の報告からいって、他の国と違いそう易く占領することは難しかったし、遠く離れた地に多数の軍隊を派遣することも困難だった。むしろ、宣教師をして、中国明朝に日本の優秀な軍隊を送り込む方法として、秀吉の海外進出を耳打ちしたことにより、秀吉の心中に国内平定が終わったあとの、国外進出の思いが湧いてきたという心情あったともいわれ、また、キリスト教から守るために、弱体しつつある中国に日本軍を駐留させ、スペインの海外進出をはばもうともあったといわれている。

その野望を考えたとき、秀吉は日本を守るには、アジアに入れてはいけないという壮大

な考えをもったからであつたが、中国や高麗にそんな思いは通じるはずもなく、禍根を残すだけの戦いとなつてしまった。もちろん、日本人の中にも理解できた武将はいなかつたといつてよい。

それが、秀吉政権崩壊への序曲でもあつた。そして、後には、明朝も崩壊し、清朝が成立するのである。

七 朝鮮の役と秀吉の死

豊臣秀吉は国内を平定し、その鋒先は外国に向けられた。文禄元年（一五九二）正月に全国の大名に対して大動員令を発令した。その知らせは上田城にいた昌幸に届けられたが、昌幸は幸村から先に高麗への攻撃が近いことを知つていたので左程驚かなかつた。

しかし、昌幸には大事な勤めである伏見城の築城工事の普請があつた。それにくわえ九州いや果ては大陸まで馳せ参じなくてはならないと思うと、戦費の賄い方に苦労することは明らかであつた。

三月一日の出陣に備えて諸将は兵を率いて、続々と九州肥前国護屋城に集結してゐた。その数は約三十万にも及ぶ。主なところでは、徳川家康一万五千、前田利家八千、上杉景勝五千、加藤清正八千、鍋島勝茂一万二千、黒田長政六千、島津義弘一万、福島正則五千、小早川隆景三万、宇喜田秀家一万、その他合わせて百余名の大小名が馳せ参じた。

まさに日本全国の名だたる武将が名護屋に集結した。集結した諸大名はそれぞれ渡海組と留居組との分けられ、特に渡海組は一番隊から九番隊に振り分けられた。この九個の隊を乗船させる水軍も九千名の兵で編成されてゐた。この長い戦いが豊臣政権崩壊への第一歩であるとは誰も予測していなかつた。当然後の家康も三成でもある。

昌幸は幸村を連れ兵卒五百とともに遠く九州の地まで駆けつけた。信之は伏見城の普請の件があるので、名護屋には同行しなかつた。

「真田安房守殿がただいま着陣いたしました、お目通りを願っております」
三成が秀吉に奏上した。

「おう来たか。ここへ通せ」

秀吉は優雅にも茶室で茶を堪能していた。

「昌幸お召しにより沼田より参上いたしました」

「長旅さぞ疲れたであろうことよ。さあ一服されよ」

昌幸は懐刀を小姓に預け茶室に入った。外にはもう一人姿があった。見慣れたような姿であった。

「幸村か？」

「御意」

「一瞥以来じゃのう。さあ遠慮はいらぬ。入れ」

「はっ、ご免仕る」

「さて安房守、小田原での戦いぶりさが見事であった。ところで伏見の方は如何じゃ」

「はあ、普請はすべて順調に進んでおります。わが長子信之が落ち度なきよう眼を光らせております。完成いたせば、さぞや関白様もご満悦のことと思います」

「うんうん」

秀吉は満面の笑みを浮かべて昌幸の言葉を聞いていた。

「安房守は何ら気にすることなく伏見の普請に専念されるがよい。ここには幸村がおればよい」

「はっ、これはありがたきご配慮をいただきこの昌幸恐悦至極に存じます。明日にでも伏見に立ち返り普請に勤めます」

「うん、たのんだぞ」

「関白様のご武運祈っております」

秀吉は満悦した表情を見せていた。

翌日昌幸は近習らと伏見に帰っていった。真田家にとってこの戦は大きな動きは何もなかった。渡海することなく名護屋の陣中であつた。最初きく話は向かう所敵なしの快進撃の話題ばかりであつた。上陸後二十日あまりで首都漢城を占領したのである。

李氏朝鮮は日本と違い新しい体制のもとで平和な時代が二百年余も続いており、軍隊の貧弱なものであり、有効な防御ができないまま逃げ惑うばかりであつた。国王は明国へ援軍要請だけは行っていた。

日本の遠征軍は北へ向かい、快進撃の報告を受けた秀吉は明国をも征服する計画を立て

たが、大政所の不幸や周囲の諫止で秀吉の渡海は延期となった。

朝鮮では義勇兵が日本軍を悩まし、李舜臣の水軍が日本の水軍を撃破して、日本の補給路を脅かし始めた。秋には兵糧や兵の不足に問題が生じ、年末には平壤の小西軍が明軍の大軍の攻撃をうけて初めての敗北を喫した。しかし、翌年の攻撃では日本軍も用意周到で明軍を迎え撃ち、これを撃退することに成功したが、痛手も大きかった。

この戦いの後、明と日本は講和交渉をおこない、交渉権を委託された小西らは、秀吉の講和条件（明及び朝鮮の屈服と朝鮮領土の割譲）を無視した形で、講和を結んだ。

一旦は終息した朝鮮出兵は其の後、秀吉は明の使節との会談で講和条件の違いに激怒して講和条約の決裂を宣言し、慶長二年（一五九七）二月再び動員令を出し、十四万の軍勢で朝鮮への再遠征をおこなった。朝鮮水軍を破った日本軍は続々と半島に上陸を始めたが、戦が長引き冬が到来すると、兵糧不足の日本軍は戦線を縮小しなければならなかった。呼応したかのように明と朝鮮の連合軍は日本軍を圧倒し、加藤軍や島津軍は防戦一方となった。

完成した伏見城では秀吉は朝鮮での戦況を日々聞いていたが、秀吉の体にも異変が生じていた。同時に前線で戦う武将たちも、いつ果てしなく続く戦といつ出るかわからない恩賞に不平不満を募らせ、その不満は秀吉側近の三成への憎悪を増長することになる。

八月訃報が日本国中を駆け巡った。秀吉が逝去したのである。その死は豊臣恩顧の大名に衝撃をもたらした。家康はその死を寡黙なまま見送ろうとしていた。

伏見の普請から沼田へ帰っていた昌幸の元へは京屋敷より忍びのものが火急の使者として向かった。京屋敷にはまだ幸村がいた。

「お屋形様、幸村様より京に大事ありと火急に参っておりますが」

「うん、何事か？ここに通せ」

「はっ」

幸村とともに行動をともしている忍びの吾一であった。

「お屋形様、伏見にて太閤殿下が昇天されましてございます」

「なんと！太閤様が」

昌幸はその事実を聞いてしばし茫然とした。とともに廻るは、この後納まりかけた天下がまたいかに動くか、頭の中に色々な思惑が廻り廻っていた。

太閤秀吉公がこの世を去った事は豊臣政権に大きな動揺をもたらした。嫡男秀頼はまだ若く元服までまだ時があった。秀頼が元服するまでは、太閤秀吉が後見人に選んだ家康を頼りとするほかはなかったが、三成をはじめとする吏僚派は家康が政権の横取りをしないかと警戒心を強めた。が、一方ではまだ豊臣政権の五大老、五奉行の体制が生きており、家康もそう簡単に行動をとれないと感じていたのも事実である。

三成が秀吉に仕えるのはある寺での出会いがあったからといわれる。浅井長政を小谷城に攻め滅ぼした功績により、秀吉は長政の領地十二万石を与えられ、一躍大名になったわけだが、そのときに小谷は廃城とし代わりに琵琶湖畔にある長浜の地に築城するとともに直臣も少なく人材が必要でもあった。

そんなある日鷹狩の途中喉に乾きを覚えた秀吉は寺を見つけて、渴きを癒そうとした。

「誰かある。茶を一服所望いたす」

と声をかけると、寺の小僧が出てきてしばらくすると大きな茶碗に抹茶をぬるく七、八分目にたてて差し出した。秀吉はうまそうにいつきに飲み干すと

「いま一服」

とお代りを求めた。小僧は二杯目には前より少し湯加減を熱くして茶碗に半分ほどの分量をたてて差し出した。秀吉はこれを受け取るとゆっくりと味わうように飲み干してしまった。そして、ウーンと満足そうな音を出し、小僧の方を見つめると

「もう一服所望じゃ」

と三杯目を頼んだのである。小僧は今度は小さな茶碗に少量の熱い茶を運んできた。その茶碗を受けとった秀吉は感じ入り、後に小姓に取りたてた。三成出世の始まりであった。

秀吉との出会いによって三成の運命は大きくかわった。そしてまた、秀吉の死によって大きく変わろうとしていた。

三成は懇意にしている大谷吉継と密談の機会を得た。

「太閤様が亡くなられた今豊臣家にとつてもっとも目障りは家康でござる。この際家康を

亡き者にせねば安泰は確証できぬと思うが」

三成は吉継の耳ともで囁くように言った。

「家康を亡き者に？」

「左様」

「だが、そう安々とはいかぬだろう。万一失敗したらこちらの命が危ない」

「忍びを使う」

「忍び？」

「お主には、真田が親戚筋におる。さいわい幸村も京におる。そちらから是非に頼んでくれ」

「真田の忍びか？一度頼んでみるが、拒絶されたときはこの話諦めようぞ」

「承知のこと」

翌日、吉継は幸村を屋敷に呼び寄せた。

「大谷殿、一瞥以来でございまするな。また火急なお召しとは如何なることで？」

「うん、ちよつと幸村殿に頼みたいことがあつたな」

「頼み事？でござるか」

「左様、少し耳を貸してくれぬか」

幸村は吉継の近くまで近寄り、家康暗殺の謀の始終を聞いた。

「事は急ぎましょう。ここは拙者の独断でやりましょう。家康殿の監視は怠りなく勤めておりますゆえ、事の正否はすぐ耳に入るでしょう」

「家康殿をぞつと見張っておったというのか？」

「はい、父昌幸が申すには、太閤殿下亡きあと、その政の行く末は家康殿が握るであろうから、目を離すでない」と

「さすが、安房守殿じゃ。抜け目のないことよ。それなら、この頼みは容易きことよ」

幸村はすぐに屋敷に帰り佐助を呼んだ。

「幸村様、火急にお呼び立てとは？」

「狸の見張りはいかがじゃ」

「抜かりなく。伏見城への出入りを繰り返してあります」

「狸をわからぬように葬れ」

「誠に？」

「手段はそちに任せた」

「かしこまりました」

佐助は配下の忍びのものを三人連れて、伏見に向かった。伏見には家康の監視に二人が張り付いていた。

「狸は？」 佐助が聞いた。

「先ほど城から屋敷に戻りました」

「城内の警備は？」

「かなり厳重です。伊賀者も警備についているようです」

「服部半蔵か？」

「首領は数日に一度しか現れませんが」

「うん？？」

佐助はしばらく考えていた。

「ひよつとすると」

一人ごとを言いながら思案に暮れていた、と。

「今夜屋敷に潜入して狸を探し、できれば討つ」

「・・・」

皆急なことで言葉が出ない。

「一刻ほど後に出発だ。備えよ」

佐助は部下を率いて、屋敷に潜入を図った。佐助は二人を連れて表門から、音次も二人を連れて裏門から潜入した。月は雲に隠れて見通しは悪いが、かえってこちらの姿も見えず好都合である。でも、佐助らは鼻のように目がきく。さらに退却に備えて育てている夜光虫を処処においている。暗闇では頼りになるものだ。

途中、見張りに出ていた侍を吹き矢で仕留めた。誰にも見つからず家康の寝所までたどりついた。狸の命も風前の灯火と思われたが。

寝所の襖が開き、狸と思われる人が出てきた。絶好の機会到来である。合図をしようかと思つたが、ふと漏れる声ももの静かな世界に響いた。

「毎日こんな身代わりは疲れるわい」

「声が大きい。誰が聞いとるかわからぬぞ」

と従者が制した。

「・・・？」

佐助はやはりそうであつたか、と思つた。下がれの合図を送り、決行は中止とした。

「佐助、どうして止めたのじゃ」

「狸は偽者だ。影武者よ。狸にまんまと化かされたのよ。半蔵がいなければ真の狸もここにはおらぬということだ」

家康を葬る機会は失われた。

九 三成と家康の対立

慶長四年正月諸大名は伏見城にいる秀頼の元に伺候して年頭の挨拶を述べた。その正月三日家康は島津義久の邸宅を訪問して朝鮮の労をねぎらつたが、これは徳川の陣営に招聘しようという行為であり、それを知つた三成は島津義久を詰問し誓書をださせている。

十日には秀頼は伏見城から大坂城に移動し、前田利家をはじめ各重臣も移動したが、家康は移動したものの、危険を察知して枚方に脱出して井伊直政に迎えられて伏見に戻つた。この時は真田の忍びは関与していない。家康はこの頃から各大名間の婚姻を許可なく進めており、四大老が家康に対し秀吉の遺命に背いていると詰問したが、自分の陣営を拡大するためにはばからず行つていた。実力筆頭の家康を誰も制止させることは難しかった。

三成はますます家康を黙って見過ごせながつたが、前田利家が二人の中を取り持っていた。しかし、病気がちの利家は回復することなく六十二歳で大坂屋敷にて病没した。これで反三成派の行動は活発になつた。

福島正則はいの一番に清正の元を訪ね、今こそ豊臣に巢食う輩供を成敗する絶好の機会と思卷いた。

「清正殿、いま三成を成敗せなんだら豊臣家の安泰ならず。如何に！」

「わかっておる」

清正はしばらく目を閉じてじっと考えこんでいた。そこへ、黒田長政殿、浅野幸長殿、池田輝政殿の返書が届けられた。清正はそれを灯明のあかるい所で読んだ。

「正則殿、決まり申した。皆同じ意見でござる。明後日深夜決行する」

「清正殿、来た甲斐があったというもの。三成の首わしが必ず頂戴仕る」

「遅れるでないぞ、ワッハッハ」

二日後、三成の襲撃隊はさらに細川忠興、加藤嘉明も加わり一大事変の模様を呈しつつあった。だが、大坂屋敷にある石田三成邸に襲撃の恐れありと密告があった。密告したのは誰か判明しないが、三成に心寄せる者か今三成に死なれたは困る者の仕業であった。

「殿、一刻の猶予もございませぬ。早くどこかへ逐電遊ばすか、大坂城の秀頼公の元へ身を預けるか致さねば。その間この左近が何とか食い止めます」

「左近、お主を置いてはゆけぬ」

三成の家臣の中にあつて一番頼りになる武将は豪勇島左近しかいなかった。

「伏見までいこう」

「伏見と？」

左近は三成の考えに疑問を持った。何故伏見なのか。大坂も伏見も同じではないか。それならまだ大坂城に入ったほうが安全であり戦いやすい。

「家康の屋敷に向かう」

「何と！」

敵の渦中に飛び込んでいこうというのだ。三成の大胆な行動に脱帽せざるをえなかった。家康殿に身を預けねば、必ずやこの命失うことになる。この窮地を脱するには、あえて水の中に飛び込むことも必要

三成の自信である。心の中で家康の行動を読み自分の安全な場所か家康の屋敷と感じた。当然驚愕したのは家康の家臣たちである。突然、敵対するであろう武將のドンが自分らの屋敷に身を隠そうと飛び込んだのである。奇策であったといってよい。この時、もし三成が家康の元に、飛びこまなかったら、福島らに誅伐されていたに違いないのである。そうすれば、家康の天下取りはどうなったかわからないのだ。

「殿、三成を当屋敷に入れてはなりません。いやこの場で逆に捕縛し引き渡すのが得策かと存じますが」

井伊直政が進言するが、家康は聞く耳をもたず、ただ

「奥の間へ通しておけ」

と言ったきり、なにもしようとしな。その内に清正や正則らの追っ手が何をあろう徳川家の屋敷に逃げ込んだことを知り、屋敷を取り囲んだ。

「石田治部が当屋敷に逃げ込み申した。直ちにお引渡し願いたい」

福島正則が引渡しを要求して今にも踏み込みそうな意気込みでわめいた。

「殿、門前で治部を渡せと今にも討ち入りそうな勢いで騒いでおりますが」

「わしが話をつけよう」

家康は清正や正則の待つ門前まで出向いた。

「家康殿、我らの気持ちを察するなら治部を何も言わず渡して下され」

「何を言っておる？治部とは三成の事か」

「御意」

「三成などこの屋敷にはおらぬ」

「何と？この屋敷に入るのをしっかりと見届けておる」

「何かの間違えじゃ」

「ならば家捜しさせてもらうまでじゃ」

正則は刀の鐔に手をかけた。

「ほほう、ならばこの家康を成敗してからにしえもらおう」

「何？」

両方の家臣たちが刀を抜かんばかりにいきりたった。

「待て！家康殿が斯くの如く申すのならば治部はおらぬと見える。仕方がないが、一同引き上げ申そう」

「清正殿がそうまで言うなら引きあげよう」

そして、清正らは何とも埒があかないまま引き上げる壇となった。

「治部殿、もう安全でござる」

「家康殿かたじけのうござる。今回のことは真に思にきまず」

「いやいや、今治部殿の身に何かあつては、秀頼様も行く末不安であらう。命助けるのが当然のことござる」

「・・・」

三成はこの奇策をしてやったりと思つていたが、家康の真意を考えると、身の毛がよだつ思いを感じはじめていた。家康の方が役者が上手であった。

「治部、しばらくは佐和山でおとなしゅうすることだな」

「??」

三成はしばらく唾然とした。その手があつたか。でももう遅かつた。

「よいな」

「はっ」

三成は承諾せざるをえなかつた。ゆうなれば、渦中に飛び込み、助けられはしたが、言がままに従うしかなかつたのである。しばらくして三成は結城秀康に護衛されて佐和山へと送り届けられ実質蟄居の身の上となつた。

昌幸は幸村の報告によつて事の一部分始終を知つた。

「家康めなかなかやりおるわ。また戦が始まるぞ」

と昌幸は心の中でつぶやいた。

一〇 上杉景勝

石田三成が蟄居して政界から身を退いた後にはやはり家康が大坂城西の丸に入り、秀頼の後見役として実権を握ることにいたつた。前後するように五大老の前田利長や上杉景勝は本国へ帰国している。

上杉家は元々関東管領家として関東を統治していたが、北条家の関東制覇により上杉本家は滅亡し、長尾影虎（後の謙信）が上杉の名を継ぐことになり、越後に君臨した。その後、養子である景勝が跡目を継ぎ、秀吉の時代を乗り切つていた。領地も越後から会津百二十万石に移封されたが、謙信以来の武門の誇りは失われていなかった。また、その財力は大名中随一といわれ、謙信候以来に蓄財した金銀の財宝と交易から得た膨大な利益が上

杉軍団を動かす原動力ともなっており、家康としても見過ごすことはできない存在であった。上杉軍団は武田家が滅亡した後となつては、日本随一の強さを持つと恐れられ、戦となれば、その姿を見ただけで、負けた気持になる空気があつた。味方につくか敵につくかで大いにその動静を左右することは明らかであつた。

上杉家の家臣に中でもとりわけ直江兼統は優秀な官吏であり、秀吉でさえ一目おき、上杉家中でもその石高は三十万石といわれ、他の大名に匹敵する所領を拝領していたのである。景勝は帰国するにあたり、領内の城砦の修築や道路や橋の普請に取り組み始めた。

一方京都に滞在している幸村は、新たな噂話の種になっている上杉が戦の準備を始めたらしいとの真意をさぐるべく、一旦沼田に帰国していた。

「父上、景勝殿はいかが考えておるのでしょうか？」

「今は家康に真つ向から立ち向かえる武将などおりはせぬ。秀頼公を担いで旗を揚げれば別だが、いかんせん敵の掌中にあり。これでは何も手はだせぬ。景勝には兼統がついておる。何か思惑があるのだろうか？」

「それがし会津へ赴き真意を確かめようござる」

昌幸はしばらく幸村の目を見つめながら考えていた。幸村もまた父の目を見つめていた。「おぬしも以前は上杉に身を置いた故、顔見知りも多からう。久しぶりに会うのもよからう。いってまいれ」

幸村は若年の頃人質として上杉家に身を預けられて上杉軍団の一員として働いていたこともあり、直江兼統とも顔見知りでもあつた。

元々上杉家のことをよく思っていなかつたのは、上杉家にかわり春日山城に入封してきた堀秀治であつた。長年上杉の領地だつたところに氏素性のわからない新領主が到着しても領民との心を掌握できないのも当然といえたが、堀氏はそれは上杉家が邪魔をしているものと思ひ込み、問者を会津に送り込み景勝の行動を見張らせたのである。景勝は会津若松の近郊に新城の普請を始め、道路や橋の普請、さらには武器や鉄砲を調達していることを家康の側近榊原康政に報告したのである。また、景勝の重臣の一人藤田信吉は親家康派であり、家康に味方することを説いていたのだが、それが反目にかわりついに徳川家への出奔となり、景勝の会津での状況が家康の耳に詳細にはいつたのである。しかし、上杉家

とて五大老の一人である。家康としてもそうたやすく戦は仕掛けられなかった。

「何かよい考えはないか？」

と問う家康に輝元らは、使者に詰問状を持たせ上洛を促してはというもので、もしそれで応じなければ会津征伐の軍を起せばよいというものであった。

その書は直江兼統と以前から親交が深い京都相国寺の西笑承兌（せうがい）に命じて八か条からなる弾劾状を作らせ、伊奈図書助が使者となり四月一日に会津に向け出立した。そして、伊奈は十三日に会津に到着し兼統に手渡した。

幸村は十二日に偶然到着しており、十四日に兼統との会談の時にこの弾劾状の話も出た。

「幸村殿、家康の憤慨はかくあらん」

「兼統殿、これはまるで戦を始めるといふ言い分ですな。この先いかがなされる所存で？」

「殿もこの件に関しては頭を悩ませておいでじゃが、家康が豊臣家をないがしろにするようであれば、黙ってはおれぬと仰せじや。三成との確執をよいことに豊臣恩顧の諸大名の分裂をはかり、あわよくば政権をとるやもせしれん。三成に味方するわけではないが、このまま家康の横暴を見過ごしても置けぬと仰せなのだ。家康への返書もそのように考えてしたためるつもりでござる」

「しかし、戦となれば家康に見方する諸大名は多いと存じます。三成は切れ者ではありませんが、いささか人望には足らぬところがあります」

「左様。三成が総大将となれば大方のものが家康につき申そう。だが、秀頼公を頂いて毛利殿かわが殿が総大将ともなれば話は別でござろう。さすれば、豊臣恩顧の大名がすべて、家康に与するとは思えぬ。三成殿にも、蜂起するならば、大老の一人を総大将にいたすよう伝えてある。この上杉が戦をすれとなれば、徳川の軍勢五万騎が来ようと、互角に戦えよう。そのための準備は整えてある。長期戦となれば、三成が西国の諸大名を集めて蜂起すれば、徳川を西から攻めることもできる。」

「兼統殿、そこまで考えていたとは、流石というほかござらぬ」

幸村は直江の深謀を直接聞き、さすがは上杉百二十万石を実質動かす人物と感心した。

「兼統殿、わが父昌幸は上杉家のこと、豊臣家のことを大変心配されており、今回拙者が

遠路上杉家の存念を聞きに参ったのでござる。真に來たかいがあつたというもの。立ち返り早速主に報告いたし申す」

「幸村殿、昌幸殿のご存分に熟慮されてから行動するようお伝え願いたい。もし敵となろうともいささかも恨むことはござらぬ」

「はい確かに伝えまする」

兼統は徳川の使者伊奈図書助に返書を渡し、五月三日伊奈は返書を携えて大阪に到着し、返書が家康の元に届けられたが、家康は見るなり激怒した。それは全く馬鹿にした内容が記されていたからである。

「謙信公の法要が終われば上洛するかもしれぬ、と」

家康は雷軋りをして地団太を踏んで悔しがった。側近らは家康のこんな姿をみるのは久しぶりであつた。家康は最後の手段として伝えた。

「西国にある諸大名に陣触れを出せ」

こうすれば、さすがの上杉も上洛して頭をたれてこよう、と考えた上である。

こう考えたのも無理はない。加賀百万石の前田家は先に家康暗殺の嫌疑をかけて、生母芳春院を江戸へ人質として差し出すことに同意したのである。大名になればなるほど、家は大事であり、潰すわけにはいかないのである。しかし、家康の見込みは甘かつた。1ヶ月近くがたつても会津からはなんとも言つてこなかつた。

上田城に帰つた幸村は昌幸に一部始終を報告した。

「父上、いかがなされますか？某はどうも家康には合力したくござりませぬ」

「ほう、わしも家康はどうも好かぬ。あ、それとお前が留守の間に三成より密書が届いておる。やはり戦を仕掛けるつもりじや」

「では、やはり景勝と三成の相計つた上での謀議でございますか」

「どうも違うようじや。三成は家康が会津討伐に向かうのを見計らつて、挙兵するつもりらしい。總大将には秀頼公を据え、後見人として、上杉が助けぬ今は毛利が座すであろう。再びの東西合戦となろうぞ」

「來るときがきました。父上！」

「だが家康は三成より二枚も三枚も上手。どちらが勝敗を決するか、それは誰が三成側につくかじゃ。家康も三成も自営に入れんが為に、いろんな策をとるであろう。すぐ京にいる間者に探らせよ」

「はっ直ちに」

家康は上杉討伐の行動を起し始めた。もちろん三成を監視してである。

十一 三成からの密書

まもなく沼田城にいる真田信之の元にも本多忠勝より上杉討伐のために徳川軍に合流すべき参陣を促す使者が到着した。信之の妻小松殿は忠勝の娘であり、家康の養女となつて信之のもとに嫁いでいたのである。当然、父昌幸への参陣を促す書状をも携えていた。

「父上、家康殿より上杉景勝討伐の書状が届きましてございます。秀頼様への謀反の疑いが晴れぬ故での出陣ということ。いやはや上杉方に不穏な動きがあるようなことは噂に聞いておりましたが、謀反とはただならぬことでござります」

「兄上、それは家康殿の言い分に疑問を持ちます。某先日直江殿に面会したばかりでござる。景勝殿は家康の横暴さに一時の反抗を起しているだけです。秀吉公亡き後の秀頼君をささえたい一途な心に遊ばします」

「二人とももうよい」

昌幸は二人の会話がこじれる前に制止した。昌幸は二人に話を始めた。

「景勝殿は家康殿の謀略の餌食にされようとしておる。前田殿が家康に従つた今、目障りなのは上杉家、上杉百二十万石は己の道を塞ぐいわば邪魔者であろう。ゆえに謀反者にしたてあげ一氣に力を削ぐ積りじゃ。しかし、家康の本心はそれだけではない。これを機に反家康勢力、三成派が挙兵するであろうと読んでいるに違いない。その通りになれば上杉討伐はもうどうでもいいことじゃ。上杉は、三成を打ち破つたあとで、どうにでも料理できると心の内に思つておるはずじゃ」

「父上、そこまで家康殿は考えておろうか」

幸村は父の考えを聞いて戦慄を覚えた。信之も同じことを考えていた。

「ふふ、わしが家康ならばそうしたのである。ただそれだけだ。さあ、どうなるか？家

康の意向にしたがい、出陣の用意じゃ」

家康は六月十八日に伏見城を発した。出陣にあたり、城の守将となった鳥居元忠と昔話に花を咲かせたといわれる。最後の別れとなるであろう感じていたのである。二十三日は懐かしい浜松城に到着し、二十九日には鎌倉の鶴岡八幡宮で戦勝祈願をして七月二日に江戸城に入った。七日、江戸城に諸大名を集め会津征伐の軍令を下した。ついに矢は放たれた。

七月一日大谷吉継は領地越前敦賀より会津征伐に向けて北国街道から東海道へ進んでいたとき、垂井宿で三成からの使者が吉継の宿舎を訪ねた。

「主三成が大谷殿に是非に面会したいと申しております」

どうしても火急に話があるというので、翌日吉継は街道を戻り佐和山城に向かい、三成と面会した。

「吉継殿、一瞥以来である。よくぞ寄ってくれた」

「三成殿が火急な用件と聞いて駆けつけ申したが、さていかなる用件であろう」

「うん、此度の家康公の会津征伐はまさに徳川の天下をほしいままにする挙動である。何故五大老の一人上杉景勝殿が豊臣家に弓引くものでござろう。豊臣に忠節を尽くすものならば、徳川の意のままに動くのは非なるものでござる。このまま捨ておけば豊臣家の意向は全くなく、向後家康の天下を認めるものでござる。もうここでじっとしてはおれぬ。今兵を挙げ豊臣家のために家康と刃を交えようと思立った。是非に盟友吉継殿にも豊臣家のために三成に力を貸してもらいたい」

吉継は神妙に三成の一言一句を聞いていたが、話が進むにつれその内容に顔面蒼白になつていく自分を感じていた。今即断を求められても頭の中は混乱していた。

「三成殿のご存念とくとわかり申した。しかし、今は時期早々と存じます。今旗を揚げればそれこそ家康の思う壺。某は反対仕る」

「いや、今こそ旗を揚げるべきときである」

「三成殿、軽挙なお振る舞いは慎まれるが肝心かと」

吉継はその言葉を少し強い口調で言うと、立ち上がって部屋を出て、隊列にすぐ関東へ

の行軍をすすめるよう命じた。三成は吉継を味方の陣営に加えられたことを悔やんだがいたしかなかった。盟友の一人をはずして陣容を考えなくてはならなかった。三成は、安国寺惠瓊と増田長盛らを佐和山に呼びよせていた。

しかし、そこにもう一人の武将があらわれた。先に三成に軽拳を慎むよう進言した吉継の姿であった。東下する吉継は道中の際に始終思慮にくれていた。吉継は体調もこの頃芳しくなくそう長くは生きられないとも思っていた。どうせ死ぬのなら盟友の為にこの命を捧げてもいいと思うようになっていた。ある日行進は東から西へと変わっていた。十一日に佐和山城に到着したのであった。

翌日、佐和山では反家康陣営の作戦会議が開かれたが、それは最高司令官たる総帥を誰にするかということであった。無論、首謀者は三成であるが、三成自身が総帥ではいかに、秀頼公を大将に仕立てても、味方につく人材は数えるほどしかないだろうと思われた。そこで登場したのが、五大老のもう一人の逸材毛利輝元であった。

「秀頼公の後見として、家康と対等に戦を進めるには、毛利殿しかおらぬ。上杉殿は会津より動けないことを考えれば、その手駒しかござらぬ」

かくして、輝元を総帥とする反家康連合が結成され始め、導火線に火がつけられようとしていた。

十七日に輝元は大坂城に入城し、家康の留守居衆らを追い出して秀頼を確保して反家康陣営の旗印は立ち上った。全国の豊臣恩顧の諸大名宛に三奉行連署の檄文が出され、急ぎ飛脚が諸大名のもとに走った。当然、その飛脚便は上田を出て、宇都宮に向かう昌幸のもとにも届けられた。届いたのは二十一日のことであり、犬伏城へ一旦入城し家康からの指示を待つため待機していた。

「父上、大坂よりの挙兵の書状が届いたと聞き及びましたが」

幸村は仮眠していたが、豊臣方の急飛脚が到着したと聞いて慌てて昌幸の陣所を訪れた。

「うん」

と言うなり、檄文を上に入れて見せた後にさらに言葉を続けた。

「大谷殿よりお前にも届いておる」

と、大谷吉継から幸村宛の書状もあった。吉継と幸村は吉継の娘を嫁にしており、縁戚

の関係にあったが、その書状には三成と力をあわせ、豊臣家を守って欲しいことがしたためてあったが、もし万一家康についても遺恨はないともあった。

「父上、いよいよ始まりました。われらいかがいましてしよう」

「そうじゃの、決めねばのう。信之を呼んでまいれ」

しばらくして信之が到着すると親子三人は城内ではなく、古びれた民家に入っていた。外には当然忍びの者が見張りについていた。

「三成が兵を挙げた。真田家としては家康につくか、三成につくか大事な事である。二人の思いを聞きたい」

「父上、かくべつに家康の恩を蒙ったわけではござりませぬが、ここまで供を一緒にしながら心変わりをいたしても、不義というものです」

信之は力強く昌幸に訴えた。が、

「道理はそうじゃ。だがそれだけでは人の心は動かせぬ。特に武士はそうはいかぬ。わが真田家は秀頼公からも家康公からも恩を受けたわけではない。この時こそ大望を遂げる絶好の機会である」

「父上、ですが諸国の大名は家康に味方することは明白とぞんじます。利は家康にありと申します。三成が勝つとは思えませぬ」

「そうかな、この一戦は五分と五分どちらに転ぶかわからぬと見た。勝負は時の運もある。わしは家康にいま一度一戦を交えたいと考えておる」

昌幸は、徳川に勝利した時のことが脳裏に浮かんでいたが、その思いには、完膚なきほど打ち破ったものでないことに悔いが残っていた。

「父上！」

「幸村はどちらに従う？」

「わたしは大谷殿の意に従い、秀頼公の為に働きたい存じます」

「幸村の言い分はわかった。わしとともに行動を同じくするがよい。父子兄弟別れて戦うのも戦国の習い。それもまた生き延びる知恵じゃ」

「では、父上。この信之は家康に従いますゆえ、ここで別れまする」

「うん」

「兄上、息災に」

「おまえもな」

真田家については父昌幸と幸村対信之との二つの選択にその後の命運がかけられた。

十二 徳川の軍勢西へ

昌幸と幸村は陣所を引き払い、上田城への帰途を急いだ。信之は宇都宮に陣を置いていた秀忠の元へと向かった。その頃西軍は伏見城を包囲し攻撃を始めていた。伏見城は鳥居元忠が約千八百を率いて籠城していたが、島津義弘らの西軍は四万という大軍で囲んでおり、落城するか開城するか決断せまられたが、鳥居元忠は家康のために最後の奉公の場所を得たのである。じつと絶えに耐えた。寡兵をもって大軍の攻防をよく防いだ。

家康は下野の小山到着前に早飛脚により三成挙兵を聞いた。小山で軍勢を集め、一大軍議を開いた。

「よう集まってくれ申した。先刻三成が挙兵したことを聞き及んだ。ただ、三成は毛利輝元を総帥にまつりあげ、秀頼公を後ろ盾にしておる。諸将の妻子は人質として大坂城にとらえられておるゆえ、去就は自由である」

家康は身の振り方は各武將にゆだねた。諸將のうち真っ先に先陣をきって言葉を発表したのは福島正則であった。

「秀頼公のためならぬ奸臣三成を討ち果たすためならば、家康殿とともに戦いたい。これは、豊臣との戦いではない。三成とわれわれの戦いだ」

と力強く言いまわした。その言葉とともに、あちこちの武將から、「そうだ」「三成討つべし」の言葉が飛び交った。家康は心の中でほくそ笑むていたが、眼光はうるみ諸將の言葉に勇気づけられた如く次の言葉を発表した。

「皆よう言うてくれた。今こそ三成を討ち果たすべく西上すべし」
「おう！」

「先鋒はさあ、福島正成殿しかござらぬゆえ、是非頼み申そう」

「やあありがたき幸せにござる。先鋒を賜ったからには、一番槍をもって、三成が御首必ず頂戴いたす」

結局、会津征伐組で三成の陣営に走ったのは、真田昌幸と美濃岩村城主田丸忠昌の二人

だけであった。

昌幸と幸村の軍勢は沼田城を経由して上田城に帰参しようとした。沼田城は信之の城であり留守の間は妻の小松殿が守っていた。夜の帳がおりていたので、一夜の宿代わりに沼田城の門をたたいたのであったが、小松殿は一蹴した。

「この城は豆州の城であり、わらわが預かりおくもの。たとえ父とはいえ門をあげ城内に入れることはできません」

昌幸の家臣は激怒したが、昌幸は苦笑いして

「さすがは小松殿、武士の妻の鏡じや。こうでなくてはならぬ。信之はよい妻を貰うたものよ」

昌幸は居城上田に馬首を向けた。

城に戻った昌幸は幸村に命じて、籠城のために兵糧米の備蓄を命じるとともに、城下の普請を命じた。問題は徳川軍がここ上田に攻め込んでくるかどうかである。それは時間との戦いでもある。情報の頼みの綱は忍びの働き如何でもあった。

京での動きは数日ごとに三成からの使者が戦況を報告してくれるが、上杉会津のことや徳川の動きは昌幸自身が問者から得なければならぬ。昌幸は佐助に命じて、上杉に使者を送るとともに、徳川家康と秀忠の動向を調べさせた。

佐助は仲間三人を連れて家康の後を追ひ、甚六ら三人は秀忠の後を追った。

佐助らが東軍の先鋒である福島正則の軍を遠方に見たのは小田原近郊であったが、どうも外様ばかりで、徳川本隊は見えなかった。佐助は二人を残し、吾一とともに江戸に向かった。江戸城についた佐助は早速家康の所在を調べたが、江戸城内にいて城外に出た形跡がないようであった。とりあえず、佐助は吾一に小田原にある二人を江戸に連れてくるように命じるとともに、自分は単身江戸城に乗り込むことにした。

当時の江戸城はまだ普請が途中であり、忍びこむにしても容易と思われた。佐助は旗本の足軽に変身して城内をまわった。城内は一大決戦が始まろうというのに静まった雰囲気であったが、警戒は厳重であった。しかし、佐助にとっては楽な仕事であった。城内での話しに耳を傾けていると、出陣は今月の末日近い日取りという結論が得られた。念のため数日をかけて確信をとった佐助は吾一に昌幸宛の書状を持たせた。

「お屋形様、佐助より書状が届きました」

「うん」

昌幸は吾一が届けた佐助からの書状を開いた。その文字は忍び文字ので書かれており、一見何の内容かわからないが、昌幸はそれをスラスラと読んだ。それは、ある言葉より斜め読みにするようになっており、空いている所には適当に文字を埋め込むという方法である。

「父上、家康の動きは？」

「ふふつ、狸めがなかなかやりおるわ。親狸は江戸にまだおるようじゃ。出陣はまだ先じやな。ということは子狸はまだ動かぬ」

「父上！戦はまだ先と」

「多分、諸大名の出方を静観しているのであろう。それとも寝返りの密書でも届けておるのやもしれん」

「しかし、先程の上方からの知らせでは、八朔に伏見城が落城し、鳥居元忠以下悉く討ち死にしたと。これで三成方の氣勢は高まり、豊臣になびく武将もいるかと思われませんが」

「この戦は豊臣対徳川ではない。三成対反三成とのいくさじゃ。家康はうまくそれを利用したのよ。だが、家康も全部が思うとおりのことが運ぶとは思わぬじやろう。秀忠の軍勢が、中仙道を進み、この上田を攻めれば、しめたもの。わしが家康の望みを潰してくれよう」

「幸村、備えは十分に整ったか？」

「はあ、食糧は三ヶ月分を。城下の仕掛けもあと数日すれば完成かと」

「うん、それでよい」

幸村はそのときは何故備蓄米が三ヶ月程でよいかわからなかったが、後にこれは納得することとなる。

西軍は伊勢に拠点を置いていた東軍側の安濃津城や松阪城を攻略するために、伊勢に駒を進め、三成は垂井から大垣城に進出しようとしていた。

東軍は続々と尾張をめざして行軍を続け、八月十四日には先鋒の福島正則は自らの居城である清洲城に到着し、ここが先鋒隊の陣営ともなった。しかし、いつ出陣してもいい体

制になっているのに、家康からは何の音沙汰もなかった。

一九日にやっと家康の口上を懐にした村越茂助が清洲城に到着した。正則以下の諸将は家康の指示がくるまでは勝手な振る舞いはいかぬと自重していたのにその口上は思いもよらぬものであった。

「家康殿は何故江戸を出立しないのか？出陣命令を持参して参ったか！」
と、村越を問い詰めるや、

「家康殿の口上を申しあげる。先鋒諸将がすみやかに美濃に進撃し、徳川家に対する忠誠を見据えたうえで江戸を出立する所存である」

「何と！家康殿の出陣を待ちわびておるのに、何故出陣せんかと言わるのか」

正則らはいきり立つ思いをぐっと我慢した。家康は何を感しているのか、何故戦わぬと思っているのだ。

「うーん、直ちに出陣の準備を整えよ。家康殿にわれらが力見せてくれよう」
「おうー」

東軍の諸将は木曾川を渡河して岐阜城にせまり、城將織田秀信は天然の要害に籠城して三成の出陣を期待し、三成も秀信の戦いに希望をもったが、包囲されてわずか2日で落城してしまった。これは計算外の出来事であり、三成の戦略を狂わした。

豊臣恩顧の心情を確認した家康は勝利への確信をいだいた。そして、九月一日になってようやく重い腰をあげて江戸城を西に向け出陣した。一方、宇都宮に陣を構えていた秀忠は八月二十四日陣をはらい小山から中山道を経由して美濃国へ向かう道筋を選択していた。家康が江戸城を出立した日に秀忠は軽井沢の地に達していた。そして、翌二日に小諸に到着した秀忠軍は本陣を置いた。

最初の目標は上田城の真田父子を屈服させることであった。十倍以上の兵力差がある戦いなど、だれが望むことかと秀忠は考えていた。真田など無視して通過すればよいと考えればそれでよかった。しかし、行きがけの駄賃でちよっと矢合わせをすればよし、見過ごしては通過できなかった。真田がごときに徳川が何もせずに通過するのは許せない自負もあった。昌幸もその心を読んでいた。同じ徳川でも家康が来るのと秀忠が来るのでは戦うべきが違った。戦う相手が秀忠であれば心理を読むすべは、昌幸のほうが数段も上であった。

再び三つ葉葵の旗と六連銭の旗が近づきつつあった。

十三 東西激突と上田城

秀忠は陣中に真田信之を伺候させた。

「正信、このまま上田に何も手をかけずに通りすぎることは徳川家の名誉を傷つけることになる。だが、無駄な日を費やすわけにもまいらぬ。ここはいかがいたそう」

「まずはこの信之に安房守の説得を試みさせ恭順させたいえ、西に向かわれたらいかがかと存しますが」

「安房守がそうやすやすと恭順に応じるだろうか？ なかなかの食わせ者と聞く」

「殿、安房守もこの大軍を目前にしては戦う気も失せるものと思われまする。信之殿を使者におくれば迷うことなく開城いたすでしょう」

と牧野康成が言った。

「はっ、必ずこのお役目見事果たしまする」

信之は言葉にしたものの父昌幸が簡単に開城するとは思えなかった。

二日に信之は交渉役に自分になったことを上田城の昌幸のもとへ書状で届けた。すると、昌幸から内々の話があると上田城に来るように使者を遣わしてきた。信之は数名の従者を引き連れて上田城に向かった。

「父上、息災のご様子安心いたしました」

「うん、信之もここ一月の間に遅しくなったのう」

「先日はわが女房殿が父上を追い払うように振舞ったようでお許しください」

「いやはや、小松殿はできたが女房よ。お前にはでき過ぎの女房よ」

「ところで父上、徳川に恭順のお心あるようと聞き及んでおりますが、それに二心はござらぬか」

「うん、三成に与力せんと思ひ徳川にもう一泡ふかせようと思つたが、あの大軍をみてはこの昌幸も怖気つくものよ。秀忠殿に明日交渉の使者をよこすように伝えてくれ」

「父上、確かに聞きましてござる」

昌幸はにやりとしていた。その笑みの意味が何をいみしているのか、父上の謀事がまたかくされているのであろうかと思ひながら、信之は城を出ていった。

「父上、佐助が戻ってまいりました」

幸村が佐助をつれて居間に入ってきた。

「おう、待っておったぞ」

佐助は手前に座って少し頭を下げる格好になっていた。

「で、徳川の様子はどうか」

「はっ、お屋形様のご推察の通りでございます。まるでこれから戦をする様子でなく、鳥合の衆でございます。われら忍びも敵陣を十分に攪乱できます」

「父上、兄上が先刻参上したと聞きました」

「うん、和平をしようかと思うておると追いついたがのう」

「和平？」

「左様、だがその必要もないであろう」

翌日、牧野康成は従者数名を引き連れて上田城に向かい、昌幸と面談した。昌幸は剃髪していわゆる丸坊主の状態であった。横に幸村も同席していた。

「軍監を務めまする牧野でございます」

「真田昌幸でございます」

といて頭を少し下げて迎えている姿はとても神妙だと牧野は感じいていた。

「ところでじゃ、安房守殿。その恭順の心構え某感じいってござる。和平開城の趣滞りなく済むことござらう」

「和平？果て、何のことござらう」

「？？」

牧野は昌幸の言葉に哑然とした。

「某、昨日信之と久ぶりに会って四方山話などいたしましたが、徳川家にこの城を明け渡すなどと言った覚えはござらぬが。あつ、そういえば、秀忠公が西に向かうにあたりご挨拶などいたすかもしれぬと申しておったので、それならば一度お会いしたいものじゃと申

したが」

「何と！安房守。予を愚弄する気か！」

「不服とあらば、いつでもお手合わせをして進ぜよう」

牧野は顔をこわばらせいそいそと出ていった。

「父上、やりすぎではござりませんか」

幸村が少し心配になって聞いた。

「かようにいたさば秀忠も見捨てては置けまい。さあ一合戦でもいたすか」

昌幸は碁でも打つようなそぶりでも徳川の軍を迎えようとしていた。

「康成、顔を引きつらせていかげいたした？」

「殿、安房守の言葉は空言でござりました。謀られましてござる。開城する意思など当初より全くなかつたとしか思えませぬ」

「何と？それは真か？昌幸が謀つたと申すか」

「御意」

「うーん許さぬ。上田城など一思いに潰してくれよう。即刻戦の用意ぞ」

事実、上田城の縄張りを見る限り、他国の難攻不落の城を思えば、数日持ちこたえれば上等と思えるほどのものであった。しかし、昌幸は戦の巧者であり、城だけでなく、城下町や周辺の地形を合わせた複合合戦で、包囲する敵を翻弄するのは、得意であった。また、秀忠やその側近たちは、その昌幸の仕掛ける戦にはまっぴりだった。

「おうー！」

徳川の軍は移動を始め上田城の東方一里強にある染谷台に布陣を敷いた。ここは上田城を見下ろすことができ、大軍を動かすには格好の場所であった。

秀忠は真田信之に命じ、父昌幸を攻めるにはいかげするか尋ねた。

「上田城は小さいと思えどなかなかの堅城ゆえ、尋常ではそうたやすく落ちませぬ。また、周りを囲うように戸石、虚空蔵山、横尾の砦に兵を忍ばせ、大軍を翻弄するには格好の所ござる。いつこの陣所を襲撃してもおかしくござりませぬ。まずは、この周りをわが手中にするが肝要かと存じます」

「寡兵をもってする兵法を十二分に駆使するゆえそれをまず封ぜよと申すか」

「御意」

秀忠はしばらく考えた末に結論した。

「では信之に命ずる。戸石の城をわが掌中にせよ」

「はっ、御意のままに」

信之は将兵一千を率いて戸石を目指した。戸石の城には、岡野将監が兵百を持って守りについてしたが、昌幸が城を放棄して上田城に戻るよう指示が出ており、信之が目指すときには蛭の殻になっていた。

「戸石の城には、もはや葵の紋が翻っておろうな」

昌幸は、信之がまず戸石を抑えるであろうと読んでいた。そのために無理な衝突は避け、兵力の損耗を防いだ。信之も、兵は退却して蛭の空になっているだろうと思っていたし、事実その通りだった。

「父上、でもこれでは徳川の大军を翻弄するのは難しくなります」

「うん、だがお互い敵とは故、信之と幸村は血を分けた兄弟。無益な血は流さぬほうがよい。信之もこちらの手の内は読めておろう。戦はこれから勝負のときぞ」

「はい」

太陽は西方の山に徐々に沈みつつあり、茜色に染まり始めた空が一時の静寂を与えていた。

十四 上田城攻防戦

秀忠軍には家康もその行動を心配してか、右腕となる人物をかなり選出していた。大久保忠隣、酒井忠利、榊原康政、土井利勝、本田正信、牧野康成らの譜代衆である。しかし、上田城攻撃に時間を費やせば、本隊への合流に遅れることも考えられた。

「忠利！昌幸は捨て置けぬ。成敗いたせ」

「しかし、あまり時を無駄にいたすと美濃への到着が遅れ大殿にお叱りを受けます」

「そんなことは百も承知しておる。今は昌幸に腹が立つのじゃ。すぐさま城を攻めよ」

「忠利殿、わが御大將がかように申されておるのじゃ。ここは一つ手柄をたてさえようで

はないか。昌幸の首を参上すれば大殿も鼻がたかいであろう」

康政が早く戦をはじめて解決して西へむかえば問題ないではないかと説得する。本田正信らも指をくわえて黙って通りすぎていくのは、三河武士の恥とまで言及し、ようやく上田城攻撃が決まった。伏兵が考えられた場所は真田信之らが占拠しており、包囲攻撃を受ける心配もなかった。

寄せてはじわじわと上田城への距離を縮めていった。しかし、妙なここにも気がついた。周辺の田圃には収穫を待つ稲穂が光輝いてたなびいていたのである。

「忠利殿、真田はよほど慌てていたと見えます。こんなに見事に実った稲をそのままにして籠城したのです。兵糧米を確保することなく籠城した故は、それまで持ちこたえられずと観念してのことでしょう。もう勝ったのも同然です」

土井利勝はこの時まで二十八歳、戦況の見方も若かった。

「康政殿、ここはいかがいたしましょう」

正信が戦上手の康政に馬を巡らせて聞いた。

「そうじゃな。わが軍も少し兵糧が不足しておる。ここは蒔田戦法で兵糧を到達するといったそう。すぐさま各隊によりく上田城から見えるように蒔田をいたすよう伝えよ。万一敵が城から討って出たときはすかさず追いかけてそのまま城へと突っ込むのじゃ」

「はっ」

徳川の足軽雑兵は田圃にはいり、よく見えるように動作を大ききにして稲穂を刈り始めた。刈った稲穂を高々と持ち上げては収穫を進めていた。

上田城内からこの様子をみていた農民百姓は地団太踏んで悔しがった。

「おらたちのつくった米を刈っとるぞ」

「あとで見とれよ。思い知らせてくれるわ」

楼上より昌幸と幸村らもこの様子を眺めていた。

「おう、やっとうるやっとうる」

「父上、やはり思い通りきました。そろそろ次の仕掛けかと」

「うん」

「では、ちょっと一働きしてまいります」

幸村は頭形兜を被り十文字槍を持ち馬上となった。従うは騎馬二十五騎、足軽三十人である。

「者供！いくぞっ！」

「おうー！」

「門を開けいー！」

堅く閉められていた門が開き幸村らは一気に城外へ繰り出し、城下町である二町程の街道を駆け抜け、城の防備の一部となっている木戸を抜けて、徳川からもよく見える場所に繰り出した。六連銭の旗印が風にたなびいていた。幸村は一旦そこで動きを制した。幸村は徳川勢を注視したが、まだ自分たちの存在に気がついていないようであった。幸村は鉄砲数挺を前面にだして放つよう命じた。

「放てエ！」

ダ、ダーン！

銃声は上田を取り囲む山々にこだましておおきな反響音を残して余韻を与えていた。菊田をしていた徳川の軍勢は何事？かと思ひ、その音がした方向を見つめた。そこには遠くからでもよくわかる六連銭が見えた。

「真田の兵が城から討って出てきたぞッ！」

徳川勢は一瞬うろたえたが、それはあらかじめ承知の上の事なのですぐさま迎撃の態勢をとるよう伝えた。一部の部隊は早くも準備万端整えていたせいか集結を始めていた。

幸村は徳川の旗印が徐々に集まりだすのを見て、その辺りを一周ぐるりと回って馬首を城内へと返した。その様子をみていた徳川の軍勢は氣勢を上げた。

「真田は腰抜けぞ！われらが姿をみて尻尾を振って一戦も交えず逃げおったぞ」

「田圃を根こそぎ刈り取ってしまえ！」

「おうー！」

一旦城内に戻った幸村は水を一杯飲み干すと準備を整えていた部隊を見渡した。昌幸も具足をつけて幸村の姿をみつめていた。

「いいかッ！これから真田の強さを見せつける時ぞ。決して慌てるでない。決して臆するでない。われに続け！」

「おうー」

半刻後、幸村は再び城外へと向かった。今度は騎馬六十騎、足軽雑兵四百人を率いてである。さらに忍びの者百人も佐助に率いられて決められた場所へと向かった。城内ではさらに騎馬五十騎、足軽雑兵五百人が討つて待っていた。さらに別働隊の騎馬二十騎、足軽百人が脇道沿いに背後の虚空蔵山の麓に向かった。

幸村隊は再び先ほど姿を見せたところへと現れた。隊形は先ほどとは全く異なり戦闘態勢をとり、騎馬隊を二十騎馬ずつ中央隊、左翼隊、右翼隊に分けて配置し、その後方の徒歩隊は二つの集団に分け、最前部鉄砲隊、弓隊、槍隊、徒歩隊である。

「真田の兵が現れたぞっ！」

今度こそ、真田の田舎侍を蹴散らせてくれようと徳川の軍勢は手早く集結した。

「それ、かかれ！」

合戦始めの鎗矢が飛び、怒声が飛ぶ。まずは、榊原隊と本田隊、大久保隊が動き始めた。その動くのを待っていた幸村も采配を振るった。三隊に分かれた騎馬隊は一斉に動き出し、大地は揺れ始めた。その突進を見て、徳川の武将らも奮い立った。

「踏み潰せ！」

騎馬がたてる土煙が段々と舞い上がり空は霞んでいるかのようになっていく。真田の中央隊は幸村が率いていたが、左右から中央隊を守るかのように前に突出して進んできた。榊原隊と真田隊は激突し誰もが騎馬隊同士のもつれ合いを想像したが、思いがけないことが起こった。真田隊が踵を返して退却を始めたのである。榊原隊は八十騎程であり、そう大差がある戦いではなかったが、徳川側から見れば退却に見えていた。だが、これも真田の作戦の一つに過ぎなかった。

「追えっ！逃すな！」

榊原隊は真田の騎馬隊を追った。それを見た徳川の他の武将等は遅れじと我先にとその後を追う。

「康政に遅れをとるでないぞ！」

その騎馬隊めがけて真田の鉄砲隊が一斉射撃をし、矢を射掛ける。先頭を突っ走る何騎かが倒れ、騎馬侍も放りだされ、一瞬ひるんだ形となり、その隙に幸村隊は木戸内へと遁

走を図る。態勢を立て直して徳川勢は一気に城下へと突入した。

幸村隊は曲がりくねった狭い道筋を駆け抜けていった。それを追うように徳川の軍勢がなだれ込んでいった。と、いっても狭い道になだれ込んでいったというほうがいいかもしれない。かなりはいりこんだところで、真田の伏兵が徳川勢がひしめきあっている所へ壁や塀を壊し生き埋めにしようとした。

「アッー！」「何だこれは？」

徳川の先陣は一気に上田城の大手門までたどりつこうとしていた。後方が混乱の状態になろうとしていたのに。しかし、幸村隊は門の所で再び徳川に面と向かった。と同時に門が開き放たれ応援の真田の騎兵と雑兵が繰り出すとともに、鉄砲隊が土塀上に現れ一斉射撃を徳川勢に浴びせた。幸村隊も新手と加わり押し返し始めた。

「真田の新手ぞ！引けい！」

榊原康政を守ろうと従者が必死に守ろうとし、康政の側近もそのために命を落としていった。かろうじて康政はその場を切り抜けた。本田隊も混乱におちいつていた。中にはこんな状況もあった。大久保隊が突入するとそこには真田と戦っている徳川勢の姿があり、苦戦しているようであった。しかし、それは真田の忍びが敵味方に分かれて演技をしていたのであり、援軍が来たぞというそぶりを見せたとたん、衣を変えた真田に取り囲まれ散々に打ちのめされた。

あるいは、辻に火をかけて退路を断つ戦術をとり右往左往するばかりで負傷する将兵雑兵は増えるばかりであった。

無事城下を抜け退却したものの今度は真田の伏兵が側面を襲った。海野三郎の率いる騎馬隊二十騎、足軽百が思いもよらぬ場所から現れ縦横無尽に暴れまわる。

「一気に押しつぶせ！」

正面からは幸村以下千名が少数ながら、秀忠の本陣めざし遮二無二突き進んでいく。混乱した徳川勢にはそれを止めるものはないものと思われた。しかし、徳川軍にも百戦錬磨の沈着冷静な武将は少なからずいた。秀忠もあまりにふがいない徳川軍に齒軋りして発破をかけた。

「敵は寡少ぞ。逃げるは三河武士の恥なり。とって返して戦うべし！」

この怒号に譜代直臣は奮い立ち始めた。

「ここは三河武士の意地をみせるところなり！」

その中で仁王立ちになり真田に立ち向かった一人が一刀流の名人御子神典膳、後の將軍家御指南役の小野次郎右衛門であった。その乱戦の最中たちまち真田の兵を三人片付けてしまった。徳川勢は徐々に踏みとどまり始め真田を押し返し始めた。

「幸村様、徳川は新手を次々と繰り出しはやこれ以上本陣へは突入できません。あとこの倍の兵があらば秀忠の御首頂戴できたでしょうが」

「うん、だがこれ以上は必要なかるう。わが家臣もこれ以上戦えば無駄死になろう。わしが殿軍となるゆえ引き揚げの合図をせよ」

「いやそれは参りませぬ。万一幸村様に災いあらばお館様に面目が立ちませぬ。拙者が徳川を止めますうちに早く上田城内へ戻られませい」

「ならぬ、大学」

「まだまだ徳川との戦いはこれからです」

「・・・大学、すまぬ。後は頼むぞ」

富沢大学は幸村が城へ戻るのを見守っていた。その後掃蕩した将兵の中に大学の姿はなかった。徳川の攻撃を必死に防ぎついに力尽き敵の刃に倒れたのであった。

激しい戦いは終焉を告げた。折れて朽ち果てた旗指物が戦場のわびしさを感じさせていた。どちらが勝ったのか負けたのかわからない戦いであったが、前半は真田の優勢、後半は圧倒的兵力を持っていた徳川の優勢であったが、その兵力の差からいえば、完全に真田の優勢といえた。

陽はとつぷりと暮れていた。真田の将兵も徳川の将兵も疲れきっていた。ただ一人秀忠だけが口惜しんで何事がつぶやいていた。

「昌幸め、このままでは相すまぬ」

本田正信と酒井忠利はこの戦いには部隊の統制がとれていなかったとして、各隊の軍令違反を厳しく吟味し、翌日には大久保忠隣にえの旗奉行杉文勝と牧野康成の旗奉行にえ費掃部は死罪を言い渡された。

一夜明けた徳川の陣営は上田城を力攻めにして落城させるか、このままにしておいて中仙道を急行して家康本隊に追いつくかで紛糾した。

「大久保殿、このままでは徳川の面目が丸潰れでござる。上田の城を二度まで攻めて惨敗したとあつては後世のもの笑いとなり申す」

「いやいやこのまま本隊に合流できず、西軍にもし万一遅れをとるようなことあらば、それこそ大殿に顔向けできませぬ」

時々挑発するように上田城の城門がわいて騎馬隊が颯爽と徳川の軍勢を横目にみながら走り抜けて戻っていく光景が見られた。また、真田の忍びがあちこちで小競り合いを引き起こさせる光景も見られたが、徳川の軍勢は処罰を察してかその挑発には乗らなかつた。たいした戦闘もおきないまま三日間が過ぎた。秀忠にとっては無駄な日を過ごしたといえた。それは、後日後悔として現出することになる。

「父上、徳川は動きませぬなあ。今一度出陣いたしましょうか？」

幸村はもう一度敵陣へ突入して見たかった。

「それには及ぶまい。もう西に向かわねばなるまい。この地に留まっておれば、三成との決戦に支障をきたすであろう。いや、もう遅いかも知れぬ」

「しかし、陣幕ははまだそのままにて」

「いや、あの煙の数を見てもよ。この刻限にこれだけの炊を遣うことはあるまい。日の出前には陣を引き払い西へ向かうであろう」

「なるほど。いかにも」

幸村は父昌幸の読みに関心していた。そんな時である。佐助が敵陣より戻ってきた。

「佐助か、徳川の動向は？」

「はっ、陣中は総攻めか撤退かもめておりましたが、この上田にこれ以上刻を割くわけにはいかぬと決し、陣を引き払う準備をいたしております。明朝には大方の者は西へ向かうかと」

「やはりのう」

幸村は昌幸の読みに間違いがないことに確信をいただいた。

「目的地は何か言っておったか」

「美濃赤坂へ向かのが大方の意見かと」

「左様か。もうそちのここでの役目は終わった。あとは一休みして美濃までいき成り行きを見届けてまいれ」

「はっ、かしこまりましたござる」

十日早朝徳川の大軍は一部の押さえを除いて上田城から動き始め、下諏訪へと向かい始めた。一方一日に江戸を出立した家康は九日には岡崎に入り、十日熱田へと進んでいた。十一日には清洲へと入り十三日には岐阜に駒を進めていた。いよいよ決戦の日が近づきつつあった。

西軍は七日毛利元康を大将とした一万五千の兵で大津城を包囲し十三日より猛攻を加えていた。伊勢方面を侵攻していた西軍の主力は家康の美濃への出馬が近づきつるある情報を得て、伊勢攻略を完了しないままにして北上を始めて、大垣城へと集結を始めていた。

十四日、家康は朝粥を済ますと岐阜城を発し稲葉貞通の先導により、船橋で作られた臨時の橋を使い長良川を渡り、正午頃に東軍の諸大名が待つ赤坂の岡上に設けられた陣所に入った。

早速軍評定が催された。当然作戦は二つに分かれた。

「西軍はいまや大垣に集まっております。ここを叩いて一気に京へ向かいましょう」

「左様！主力は安濃津攻めの上駆けつけておれば疲労困憊絶好の好機と存ずる」

徳川の譜代井伊直政や池田輝政が大垣攻めの意見を述べた。一方福島正則らの豊臣恩顧の大名は違う意見で

「大垣城はなかなかの堅城にて西軍の後詰がある以上早急の勝利は望めず、むしろ大坂城を一気に攻めるのが、西軍の思いもよらぬところと存ずる」

と力説してやまなかった。決断は家康にゆだねられる格好となったが、その発言は福島らの諸将を奮奮させた。

「ここは大垣城は攻めず、三成の本拠佐和山城を落とし、さらに大坂城を攻める」

この発言には大きな意味が含まれていた。東軍に味方はしているが、実際は豊臣恩顧の大名も多く、二心をいだくものもありいつ寝返るか不安な材料はいっぱい抱え込んでいた

のである。実際、その家康の決断は三成の耳に入り、三成は予想通り家康の術中にはまり込んできた。

西軍の三成陣営も軍評定は二つに分かれた。島津義弘は東軍の足並みが揃わぬ間に家康の首元を襲撃すべしと唱えた。

「家康は岡山の本営に到着してまもない。長旅の疲れもある。ここは夜襲をかければ必ず勝機があるはず」

しかし、慎重論も渦巻き

「西軍の士気を高めるためにも、毛利輝元と秀頼様のご出馬を待つべきと存ずる」

「いや、そんな悠長な事は言っておれぬ。東軍はもう目と鼻の先まで来ており申す」

そんな議論の折、もたらされたのが先の家康の動きである。

「おのおの議論もそこまでといたさねばならぬ。不測の事態じゃ」

「いかがされた？三成殿」

「今入った知らせじゃ。家康はわが居城佐和山を攻め落とし、その余勢にて大坂へ攻め上ると」

「何と？大坂城を直に攻めると？小癩な家康め」

三成は少し考えたあげくこわばった顔つきで地図を指し命を下した。

「東軍を阻止するのは、ここ関が原を置いてはござらぬ」

「おうー、今ぞ決戦の時！」

三成は婿の福原長堯を大垣上に残し、全軍を率いて関が原へと移動を始めた。夜中の雨の中の行軍であった。

両軍衝突までの間、家康と三成はそれぞれ有力武将の内応工作や寝返り阻止に力を注いだ裏工作での戦いでもあった。その答により勝負の行方は決定された。

家康は伊賀者の連絡により西軍の関が原への移動を知った。それを聞いた家康はほくそ笑んですぐさま出陣しよう命じた。先鋒はやはり血気さかんな福島正則と黒田長政が受け持ち、藤堂高虎や加藤嘉明らが後に続いた。

三成は北国街道を押さえる位置ある笹尾山に本陣を置き、畿内への侵入を阻止する布陣で東軍に備え、さらには東の南宮山麓には毛利勢、長束勢、長宗我部勢などからなる大軍が東軍を包囲する形で鉄壁の布陣を構えて家康を待ち構えていた。

雨上がりの朝は霧が立ちこめ視界をさえぎっていた。馬の鳴き声、木々がこすれる音は聞こえても、動く姿は不鮮明であった。その霧が晴れかかった時に一大決戦の火蓋は切つて落とされた。先陣は福島隊であったが、抜け駆けするように松平隊井伊隊が福島隊を追い越して、西軍に鉄砲を撃ちかけたのである。それを見た福島隊は遅れじと全軍に突撃を命じ、ここかしこで戦闘が始まった。どちらも、前後左右敵か味方かわからない戦いとなっていた。

一刻がたつても一進一退の攻防が続いていた。どちらが有利かなど全く及びもつかずいつ終わるかしない戦いはこの世の終わりの戦いのようでもあった。家康も痺れを切らしていたが、三成も動かぬ毛利勢と小早川勢にやきもきしていた。

家康は背後の南宮山麓の毛利勢が動かないと確信を持つと本陣を前進させて激戦地へと向かい將兵を鼓舞させようとした。

一方、三成は島津家に応援を求めたが、自ら防戦するのがやつと拒否され、かねての打ち合わせの通りに総攻撃の狼煙をあげた。この狼煙で小早川勢と毛利勢が一斉に東軍に襲いかかり戦局を打開するはずであったが、何も事がおこらなかった。

毛利勢はただ情勢を見つめるばかりとなり、小早川はまだ迷っていた。家康もただ小早川の動きが心配の種であり、決着をつけるにはどうしても小早川の裏切りが必要であった。「ええい！もう我慢ならぬ。小早川めがけて鉄砲を放て！」

家康は小早川の陣中に鉄砲を撃ちかけて脅しをかけてみた。

ダ、ダーン！

自分の陣中に鉄砲を撃ちかけてくるのが東軍と知ったとき、小早川秀秋の脳裏に家康が怒り震えている姿が浮かんだ。采配は振られた。

「われは家康につく。狙うは三成なり！」

無傷の一万五千の將兵が松尾山から激戦で疲労困憊している大谷隊へ津波のように襲いかかった。大谷吉継は西軍の中でもっとも勇猛果敢に戦い、互角以上に戦っていたのであるが、そこに新たな大軍が襲いかかったからたまらない。ただし、吉継は小早川が裏切

るかもとは予測しており、決して慌てなかったが、予測しない攻撃にさらされた。それは、
今まで共に戦っていた脇坂、朽木、小川、赤座の四武将が刃を大谷隊に向けたのである。

大谷隊は一気に崩壊し、吉継自身も自刃して果てた。小西隊、宇喜多隊も崩壊しはじめ、
かろうじて石田隊、島津隊が残っていたが、島左近が戦死した後の石田隊は戦意喪失して
おり他の部隊が潰走するのをまじかにみて戦場から敗走していった。三成自身も数人の側
近に守られ本陣から姿をくらましていた。

島津義弘率いる島津隊だけが戦場に孤立する形で残されていた。千五百の兵で望んだ戦
いであつたが井伊、本田の家康直臣の攻撃を防戦していたが、石田隊が崩壊する頃には半
数程にまで減っていた。もう戦いの趨勢は決しておりあとはどう脱出するかであつた。こ
のままでは全滅しかなかった。義弘のとつた戦法は捨て身の戦法ともいえた。

「豊久よ、ここは薩摩軍人の粋を徳川に見せようぞ。本陣を突破し駆け抜ける。敵は度肝
を抜かれひるむであろう。そこが付け目じゃ」

義弘は通常戦場で敗走する場合、敵とは反対の方へ脱出するのが常套である。が、しか
し周囲を敵に囲まれた格好になりつつある義弘は、無事打開して脱出するには敵の心臓め
がけて突入すると見せかけ敵の動きの隙をついて脱出する奇策をとるしかあるまいと思つ
た。

「しかし、全滅するかもしれません」

「他に方法はあるまい。これは賭けじゃ。家康にもの申すのじゃ」

「はっ、直ちに出陣の支度を」

「目指すは敵の本陣！」

「おうー！」

十文字の旗印の軍団がゆっくりとそして地響く牛の群れの如く突進を始めた。勝利を目
の前にしていた徳川の将兵は突然の敵の途方もない動きと異様な雰囲気圧倒され、その
行動をしばし呆然と見つめていた。

「あれは何だ？」

家康はこちらに向かってくる一団に目を見張った。

「島津がこの本陣に向かって参ります！」

「誰かあれを止めい！」

徳川の將兵は呆然と島津の突進をただ見つめていた。島津も攻撃をしかけてこない敵には目もくれずただ前に進むだけであった。その塊の一団が家康の本陣を前に方向を変えて離脱を図った。

「逃すな！追えい！」

島津軍は退却するにあたり追っ手の軍勢を防戦する手立てとして鉄砲を有効に使用し、井伊の騎馬隊の追撃の手を阻むのに貢献した。直政も鉄砲傷を負い、後にその傷がもとで亡くなるのである。後に家督を継ぐであろう豊久も大将義弘を生かすために討死する。無事に逃れた將兵は義弘以下八十名程であったが、起死回生の作戦は見事成功した。

戦場では首実検が始まっていた。当然見つかからない大将首のために落武者狩も始まった。家康の動きは早く寝返った小早川秀秋の忠誠をみるべく佐和山城の攻撃を命じていた。

秀忠軍は中山道を急行していたが、決戦の舞台にはまにあわず途中で東軍勝利の知らせを聞いて心中安堵したが、家康の立腹はすぐには消えることはなかった。上田城の昌幸が勝利の行方を耳にするのは合戦から七日がたっていた。

「治部殿敗れましてございます。秀忠軍はやはり合戦には間にあいませんでした。小早川の心変わりがなければ勝利の美酒を酌み交わしていたでしょう」

「うん」

昌幸は櫓の楼上から西の空に沈みつつある赤く染まった太陽をじっと見詰めていた。心には勝利を目の前にしながら敗者となった自分の運命の過酷さをかみしめていた。勝負は紙一重というが、その言葉の意味をことさらながら噛み締めていた。

十六 死してなお家康を震わす

三成敗れるの報を耳にした昌幸は徳川からの軍使を待った。軍使にたったのは、信之の側近であった。

「よいか、右衛門佐父上にあつてよく申すのだぞ。自害はならぬ。生きていればまだなんとかなると」

「はい」

昌幸は幸村と軍使となって到着した沢村右衛門佐を出迎えた。

「お屋形様懐かしゅうございます」

「右衛門佐、息災のようじやの。信之はいかがいたしておる」

「はっ、上田に攻撃を仕掛けるまでは、いつ裏切るかと噂されておりましたが、日が進むにつれ徳川直臣の気持ちもやわらぎ、今は労いの言葉をかけてくれるようになりました」

「左様か。信之に心労をかけて済まぬと申し伝えてくれ」

「はい、確かに伝えまする」

「お屋形様に信之様よりは是非伝えてほしいことを申しあげます」

「何じや云うてみよ」

「必ず死罪とならぬよう尽力をつくしますので、ご短慮遊ばさぬようにとの事でござる」

昌幸はそれを聞いて笑いをこらえているようであった。

「心配には及ばぬ。腹を切るのは遠慮いたすぞ。万一家康の面前でこの首打ち落とさる事あらば、そのときこそ家康が首わが前にあるべし」

それを云って不気味に笑い始めた。右衛門佐はその言葉を聞いて昌幸の大きい存在を改めて感じていた。

二日後、昌幸は開城した。開城とともに徳川の方の青山忠成が軍監として入城し、真田の将兵を武装解除し、農民兵には帰宅させた。昌幸と幸村らの一族縁者は、城内の屋敷に幽閉され家康からの沙汰があるまで、預かり置きとなった。

佐助らの昌幸の間者としての役目は終わった。信之は彼らを雇い入れることを口にしたが、佐助は断固としてことわり、農民として帰化する道を選択するしかなかった。

戦後の西軍へ与した諸大名への処罰は厳密を極めた。石田三成、小西行長、安国寺惠瓊の三人は逃亡中捕らえられ、引き廻しの上に六条河原の刑場で斬首され、その首は三条橋にさらされた。宇喜多秀家は薩摩に逃れたが、その後捕縛されて八丈島に配流となった。改易となった大小名は八十八名、滅封となったのは上杉、毛利など五名あり、その合計所領高は六百三十万石にも及んだ。それが一気に徳川家康の思いのままにある所領になったのである。徳川家康はそれを恩賞として東軍の諸大名に与え、自らも徳川家の直轄領を四

百万石に増加させた。

真田昌幸と幸村父子も当然死罪をまぬがれないと誰もが思った。特に秀忠は遅参したことを上田城での足止めが原因だと思っていたし、死罪以外が考えられなかった。が、しかし、昌幸の長男信之は父や弟の命乞いに奔走した。

妻小松姫の父、本田忠勝に訴えたのだ。

「是非にこの信之の恩賞にかえまして、父昌幸の助命を嘆願いたします」

「うーん、大殿に言上しては見るが、果たしてどうなるか某にもわからぬ。昌幸は、一度ならず二度までもわが徳川に痛手を負わせた張本人。なにもせぬのが不条理というものが、まあ、そなたの働きに免じてとなら考えてはくれよう」

家康から本多の元に届けられた書状の中には当然昌幸、幸村父子の行状許し難しの旨が書きしるしてあり、死罪では事足らず三成らと同じ晒し首だとあった。だが、忠勝は井伊直政にも懇願して、信之の徳川家への忠誠を強調して家康の怒りを少しづつ解いていった。高野山に蟄居して引き籠もるとの条件なら、その罪状許してやるとの沙汰がようやく出て、信之の元にその旨知らされ、それは即座に幽閉中の昌幸と幸村および真田家臣に伝えられた。

「お屋形様、幸村様お沙汰が決まり、高野山へ配流となりました。何よりのご沙汰と信之様お喜びでございます」

信之の使者に再びたつた沢村は喜びの言葉を伝えた。それを聞いていた昌幸は無念さの表情を顔いっばいに出してこう云った。

「家康こそこの思いを味会わせたかっただのにまことに残念」

幸村は黙って父昌幸の無念の思いを聞いていた。そして、生きてさえいればまだこの無念を晴らすことがこようと思うのであった。

高野山へは昌幸の家臣の内、池田長門守以下十六名が随行した。昌幸の妻山之手殿は大坂城に人質として捕らえられていたので、釈放後上田に戻ったが、昌幸の顔を拝することなく信之庇護の元に暮らした。幸村の妻である大谷刑部の娘竹林院は子供たちとともに父に従い、高野山へと旅たった。

一行は真田家ゆかりの蓮華定院に一時身を置いたが、山麓の九度山村に家屋敷が建つと

さらに五年が過ぎたがご赦免の話はいっこうになかった。昌幸は眼光だけは鋭かったが体力は衰え床に伏せている時間が多かった。慶長十六年六月静かに息を引き取った。その同じ月にもう一人豊臣にとつて重要な大名が無くなった。加藤清正である。清正の死は秀頼にとつて手痛い損失であった。家康から守ってくれる人物がこの世からいなくなったのである。その死は毒殺によるものとも噂された。家康は清正死すと聞いて邪魔をする大人物が減ったと安堵した。もう心の中には過去の戦いで翻弄された昌幸の死など関係なかったし、知る必要もなかった。

三年後の慶長十九年になると秀頼が方広寺の再建を進めており、その大仏殿の鐘の銘文に不吉な文字があるとこじつけを図ったのをきっかけに、徳川と豊臣との間は急速に悪化をたどり、ついには豊臣方は開戦の決意を固めた。

幸村は九度山を抜け出し、大坂城へ入城した。家康は真田が大坂城へ入ったという知らせを聞いて身を震わせて側近に聞いた。

「入ったのは親か子か？」

「幸村の方でございます。昌幸はもはや鬼籍の中でござる」

「そうであつたのう」

家康は胸をなで降ろした。しかし、後に再び真田との最後の戦いを目の当たりにするとは思っても見なかった。そして、本陣を揺るがす大激戦がおこることも、全く想像しえないものだった。幸村は入城後真田丸を築いて大坂城を一段と難攻不落の城としたのである。櫓には六連銭の旗印が木枯らしに吹かれ強くはためいていた。

(完)